俳諧傳書

全

目次

一廿五箇條口傳
一花櫻ノ傳
一切字ノ傳
一脇第三ノ傳
一賦物ノ傳
一三十三法傳
一剛柔竪横傳
一十八句法
一明鏡白砂人傳
一大家三十三法
一吐露人生風傳
一六儀ノ事

一五儀の事
一十躰の事
一金毛要語
一俳諧正道論
一七名八躰の事
一月あこうの

廿五箇條抜萃口傳

一一向宗の事　但戒入道愚智文盲の能聞安く諸宗より高し
一歌は俳諧あり　但詩連歌は上ぶたり
一能太夫の事　但発句は太夫能太夫を以為すを本とす
但離る方を連句なりと知るべし
一連歌の事　但連歌は情を宗　俳諧は姿なり

梅なて草かふえしき植根ろ那
連歌師は本毎の花ある毎は草かふえしきも梅の匂ふまて也梅なるて植根
の家かふえしと写ふ写らる也連歌の位なるは俳諧を眼前にきく也
一幸崎傳　唐崎の松は花よりおもしろし但弘と云は松は花なるを
云ふ写る嘘ふ事なり然て云ふ花は猶云ふ花なり幸崎の松なるを又花也
一むかし水傳　但俳の家人便ん
一四季送りの雑
年くや積る年を積る雪
俳諧をむかし水の事世誓傳安

皆変て年見てまきらなり

時ふる秋のあめ　ふる　蛙ふる

歳旦かくのごとし

一本櫻の傳　宝永時代まで花二本のよし宝長の比四本の花ありて異勅命をかうむ　但菊と櫻の比のもとをとゝふる枝を安産也　花ハ枝ごとまたはうち千仏の花ハさくら也　他国の花ハすべての花也

一花と梅の傳

幸　嵯の松ハ花ちりはてゝ　山ハさくらをたゝまほる春　雨

（花を旨　さくらの比）

山伏の山と一つをやをりもちら　門　七もよう　野ハ花　ハるの雲

（梅ちる　さくら　梅のさくら）

山ハまく花を高く　霞　雲

望を初さくらは咲

度桜許ハ

支考

口傳山ハ野と分てと知る一しる　梅ちるを野

目利してとゝふる　梅ちる野ハ

おそれ　櫻の印　本ハ野ハ

右の花ハ似世和歌金玉集但花初ハ匂のゝ前ハ枝なとゝ　ちるを　ハ

くのごとく仏ちくらふ

ちこの芽野ハ岩ちんを

右ハ花の手の事　但芭蕉の句ちの花よ

永永のをを山さくら　咲ちり

右ハ櫻名僧一句ハ多句見合すへし

○　切字　発句の傳

七　別の事

いさらちハ。ちこのこゝろ　芭蕉

三段切

切字事　段段ハ数多有　花と月くらの世ハ強ハ推量　第一て大切ハ　切字ハ　俗説なり

切字の事ハ　初学ハ　俗説なり

耳目の三段

心の三段

聞くもきき。山のもきき。　仙雄

但目耳口

毒の葉。南りの宿の。　高汁

父子うん。母とやく爲こと。第一の毒

但塩を入すぬるうて形を崇るべし

三字切

子吾不よ。童敬さきめ。飛むうん

蛤よ。伊勢い京の。方きうう奴

名自や。おくもたうん。明るうう

但上下もの建ぬくすぬし

若市や。日ゐく高し。空の峰

但連ぬくうて子遠けれを考てうう

二字切

山高く〜心の底や秋北月

君火堂市。よきの月見せん。望九け

二段切

やう鎖も。空也の傳。空の内

大四し

うちうて〜の京の京。葉そしめ

高市ふと別日の見かく。毛伊高

を四し

米空。人を。今春の月の姿

羽衣よ。新月。あう我。二月ゐし

まくも。人きの。春こうし

春の春〜空ふ月ぬ月をとゐうう

押一字

夕月や。秋い。いろくの物べ外

上の押へ字を切張

春の月七　今や春の月と　ゆとゐうう

但やとありても秋ハの字を切るなり ○ふる俳

三足猿（書ス ナリ） 雜の句俳

俳諧ハまつの山なく猿の声

心ハ苦ノ西
真草行

但雜ハ俳諧五常の不なる也句の心ハさるの尾ハ長ク俳諧もなのごとし

一雜の句の事　名所ハ多く苦しきて口伝

イの木花をも知らぬ句ハ

但此句の心を安らかにして縁組ぬまを見へし

山ゆゑ水ハ無し　水の音

但此句のしを字ハさりなきてのときハ俳諧もなしをの字也

○假名留りの脇の事

さいらひのまハりの句と

故のごとく俗言のすりハ留る也 ○ゆるる初雪百然の

○第三の口伝

句の切りまて四十七字まて留る習ひあり但何とあるとも苦しからぬ事

杜若　時鳥　の此ハ但二字切りと云一字を重ねきまて留る也

うるおりの句ハ　まて句の習ひ　うるおりまて　七字まて　静まて　たらう

まて　行まても　うるの優雅なる者しらるかハあなり

○賦物の事

一賦何川　但上なる也

一賦川何　但下なる也

○俳諧の詩　但ふる詩なる

一五韻そうはう韻字の助み　此一冊の傳あり

一七言吟十二句　表六句　裏六句　但百韻の心まて表ハ神祇

一素春に傳　三句の内何れなりとも春桃のたとひ木植物なるし口伝　秋教忘苦しうして

一表まて季をひ苦しうして然れとも其時節の植物なるまて続へし口伝

冬　大根の葉ゆるめる土の御ゝ[illegible]て

秋　山下ゆるに鶏頭の[illegible]む　秋

春　法師の湯作ゆく送る花雲ゝ

夏　縄手を切りて麦の七束

歌と句の集まり

中よりて傍岩の堂金の佛ゝ[illegible]

碧を吹ゝて[illegible]て[illegible]夕月

一歌仙の名称表十三句目也十一句目の翌日夜命ゆるゝ[illegible]千句

一[illegible]九月[illegible]句[illegible]の[illegible]

一三句目の仕様[illegible]神祇釈教のゝ[illegible]何[illegible]苦[illegible]

○俳諧四季詠

一春風ハ[illegible]　一秋風ハ[illegible]　一夏ハ[illegible]静也

一夏ハ野山[illegible]　一秋ハ[illegible]　一冬ハ[illegible]

一[illegible]ハ[illegible]　一雲ハ[illegible]　一雪ハ[illegible]

一[illegible]花ハ[illegible]　一[illegible]花ハ[illegible]　一[illegible]花ハ[illegible]

一[illegible]低[illegible]　一春雨ハ[illegible]　一五月雨ハ[illegible]

一秋の雨ハ[illegible]　一時雨ハ[illegible]

一[illegible]雨ハ[illegible]

一[illegible]ハ[illegible]也　一水[illegible]ハ[illegible]

一[illegible]ハ[illegible]　一[illegible]

一[illegible]ハ[illegible]　一[illegible]

一花ハ[illegible]　一[illegible]

右故実[illegible]

○発句初の[illegible]論

赤い実の何のくゝ[illegible]初しくれ

老[illegible]を捨[illegible]の肌[illegible]

乙由

財堂

[illegible]の山[illegible]やうつ[illegible]風　春因

[illegible]つ[illegible]風　猿も小蓑をほしがるか　菊

[illegible]の[illegible][illegible]の[illegible][illegible]風[illegible]動[illegible]ぬ[illegible]よくく考てよし

延織仕事[illegible]　麻父

[illegible]の[illegible]の[illegible][illegible]も[illegible]動[illegible]すくく事[illegible]の考[illegible]て

よくく事[illegible]

○年年[illegible]の雁

[illegible]風　四[illegible]きやとハ　[illegible]やらん

[illegible]の[illegible]年年[illegible]

明和三中冬〻　桃嶺子俳羽毛寫

六儀角

風

雅

◎三十三法の事

角[illegible]木[illegible]やとり[illegible]や梅の花

南勢足代弘氏から[illegible]して　[illegible]風[illegible]氏の名句也

風喩添歌古今集の序

歌[illegible]やけ[illegible]ものこと[illegible]

[illegible]の花

[illegible]ものと受やとの花

[illegible]さきの命へ[illegible]花[illegible]哥也宇佐[illegible]の崩御の後ハ即位

進めまる[illegible]花[illegible]時[illegible]初り神書[illegible]梅を[illegible]花[illegible]ら[illegible]り風諫

の意也風ハ物[illegible]仍て剣の[illegible][illegible]也を数へ[illegible]花[illegible]ハ和也虚

実[illegible]花[illegible]ハ虚也文質に花[illegible]ハ文也風働く處文章の体用

[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

古今集[illegible]哥雅の体

山たちうあくまを花ちる庭をは風ぬけあるに
雅風情尚雅風の一体はなるべし却説の抜ん
も雅の体也風雅ゝ六義の魂魄とゝり雅の体　うの抜りへハ
風用雅理体とせを風を体とゝる所也
いせをぬの
伊勢の本の花ちるを匂いる
古今集説ひ哥
あの顔のむへも富を楽さきをの
三棟四棟れ賦たゝりして
と三むを四むをれ敷たゝりせりの事
風雅頌発心の扱ひを
梅若菜ゆうこの宿は松をゝ汁
古今集かゝへ哥

咲花よ切ちゝたくゝ多のおきるさ
多の咲くつきをいるもちゝ長く
切ちひたくゝ分ちたくゝをの多を隠し月を含めをり
十六夜や虫花言ゝるれとの雪雪
月のあくと上弦ゝ虫花の言ゝて切ちゝむれタヘハ比キョウ
古今集ゝそゝへ哥
某ゝ多敷あたの某の切をいるは
恋しきをゝきをゝやをゝらん
切をゝゝしをゝるゝ雨
古今集の序
我立をゝもゝ常きしゝ雅あの
をゝあの言ゝ分ゝゝみ体ををゝ
奥の体切ちたくゝく興をを賦比奥ハ言葉の扱ゝ楽むく

さてさてさんとさ書しはあるまんとあんと定家卿云給らしは古
今の大秘伝なる事也
あのくとる無底なる秋の風
真は風情をもて情を深を調ふ行草は志の変革をもて
情をもたはせの一体を錯雑する也
梅香るの川とるるの山路の春
行は風姿にて姿を情を生ずる物也
景情を花見の舟の月は七夕清
草は曲節をもて作の働きなり
麥林の秘書明授鏡云不益真也流行は草也三足儀は真と云真実を
五名の名筋球知らを行は世の常の世情を若しを草は其情の解け安る
もの也真室秘文録に曰真は則体をもて物をもちゐ行は姿体の姿也俗と
通達せる姿也草は道をそなへて芸を蔵を負ふ山人のとくも也は俗

文より教ヲ顕ハスカ俳諧ノ大旨也然ルニ真ニテハ能リ教ヘニ進ム故ニ行ノ文ヲ以
テ風雅ノ体ヲトス行ヨリ真ニ静リ草ニ働ク也行ノ一体カ風雅ノ凡ノ居ヘ所ナ
リ是ヨリ詩歌ノトリヨウ也

大集伯　雲折く人を休むる月見船

西行法師の哥

中くよ折く雲のかくれて
月をもてなす為仏成者柴

梅さそふ花の前の夏の月　支考

管神の梅ハ花ひの御流

梅梅雲の詞を取らへて夏の月の雲地獄屋へ雲ふ作の
働きなり梅梅花花友よ孤を孤を
相来に鶯の鳴なる　塀　の内

換骨

裁人

俊成卿の哥

名をれば世をうの秋風かなしさ
うつろふ色をなほ草の里
神垣やおもひもかけぬ紅葉
齋宮の女御の哥
神垣のあるうとおもふまでに
おもひもよらぬ紅葉かな
山里を万葉おもしろ梅の花
前よりおもしろおもを七文字
へるおもかげよりしろおもて
匂ひ也詠歌万葉も山里おもしろ
二りの色きを一ツ色きに仕
元ろう田畑のはたけ悪き
草種や花のさかりを賞歩行

雜部

結前生後

現在より未来を
思ふ句法

現在より過去

前ハ花の去る月の秋の名残なるを更科や姨捨山玉田ふ
匂ふ後ハ花の雪ふる時の月の光さく地ひけ草種の
生へおろしたいと草花月を観せる也

野島石月ハ梅の花をうり
盗人に逢ふおもあり年の雪
前章ハ知花の恨なるけるを初夏の江雪て初去の江雪
の初雪を雪しを梅の花の雪なりしかと若名花を野て
花の名のをとしく白雲の後生成望
名月や色に更しき新も照
剣中の美の字を押るもおらあ和の仕方樂て更人のあ
一峰を望むと云へるも月の事なる変成剣中の間解にして
上面ハ唯花法師桜士ふとの打問ひきる月のあれ月
をもめ〜ふをそ〜ふもれハ人のきとみるふを業平閑敬寂の

作業を以て化形述べる法

嘆息を物語り言せる也

不生さやかき起されし春の雨

髪をへて面影〜五月雨

水枯や埋うもれ痛む人の影

春の雨の白の父母といへる事物うれくさきも春の雨

の雫に芽を出し虫穴を出る時蛇の首擡る此の作保

姫の涙てかき起せる見るえといへり

五月雨の白は又苗木刈り山野すき度り雫身晴を降く

事を思ひ出せる髪を乱す人を降く森面作化の万物を見

せる也水枯の白は蛙を考へ〜く鳴下しを枯あらは草が枯

枯草も花も芽枝枯るるさひき時蛇の姿を用うる痛

うるくにのくきく人を祝也を表白の極刑也

十心捨んせよ花ふる五器一具

説体

變態

此句は支考の東武行に俳諧のふし也を喰欲の事六欲

の内の重き物さへ調れは一具の五器は大少あるとの也人間の

物〜からさる事辞義生涯のるはるとふく五器一具給

りし事也

四ツ五器の桜ちる花見の跡

長瓜を蟹を十七文に立い給ふ説の体とする也

四一枚桜ちるを見る柳哉

西行上人の左の歌の古歌をあらし白也

左のへにはるれるの歌の事

さいく迷て去る白りの梁

四枝を柳陰の高きとは風姿より立ちとは所を地

ひ高くふる風情うしとなり

林日ちい〜迷て去とり情也四一枚とは移しとふ聖人去れと云也

姿情ハ事に移りて見れば所多き也

夢多き　切の〜花の多き物の為

見せもの　旅宿の里や秋の雲

梅の香よりのつと日のあらぬ山路哉

對句

對意

切字

たれかものさはぬ柳のたゆへなく

さゝ

古池や蛙飛こむ水の音

五照

仙や白雲障るものとなり

双関

やう〜雁鳴く中の秋なれや

一座一句

夢や柳のうしろ義のまくら

二座一句

夢の世一つて柳義へのえらびき也

俗名義発　俗名義発　寺の松

高ゝすゝの一ゝ四世也

影墨夏

夢より出て夢ゝ影墨ゝ昔月秋

月と夢との切りてあき事も比較の事知見て寄ふ

ゝ立ゝ山雪月ハ秋俗ゆゑて見ゝとゝ使ふも古き故

ゝ寄てゐるとゝ月てはとの字助字也夢と月と体を云

ゝ墨ゝゝゝ影墨ゝ

外月や二月も常の切ゝ似ゝ

昼ハ其重の七夕の事ハ言外ゝ置て六月と云ハ此働を弄

切と云ふ

弄切

○月花の事見月の事　発句ゝ事

一月といふゝ秋ゝ月ゝ月ハ三秋冷色の形也

一月ハ花ゝ数の多き事ハ月くに月ハ多ゝ故也

一月秋と断ゝ色ハ妹ゝ秋ゝ法也秋の月ゝ月ゝの内ゝ必月ゝ

月月ゝ及ふゝのハ使れも月ゝ九月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ隠

発の二法あ案

○陰の法　炉まろや朝ゆふの星さらみ
もらく　松の丘より稲の香
焼捨の香まハ法も神めかて
去年焼捨の花月を含むハ向作の御きそう前日よりはるを移
らあと成実をへ〜稲の香の船を田毎の移りと見て古人ハ集題の
部の奇あり心なしさめうかつさう船や焼捨山ハ照る月を見て
山奇の照る月を物さして日星の指合を逃ふ〜也

○歌の法　あらかなの芋よくと賞ぬき
今宵の月の名を陳ぶなし
数てあるハ九月ハ前日より月を用おるて月の体を作ハ多くハ学を
あらもの也二日一意をて二日〜て二日さるあ〜られ也

○宵宮の事　あるるの意也但あらふるを荒神の事よ
月ひとしもあり宵ハあく宵を祭
宵宮ハあらめる神の宮迄〜

北よう　萩の風戦きしう
八月ハ旅面あき小幅巾
宵宮とて宮ハ月まるぬ也さるを今宵の宮迄月として
撰集せるまりとるへ〜ろ宮迄〜とて秋まにさるる伊勢
のあ宮迄宮ハ九月中旬より さて御迄宮ハ南西まし第ふ人ハ北面也行
萩の宮ハ神風のあ〜ハを月と成るるの也さハと咲て行れ
る事ハ也〜月の宮ハ九月と八月と月次の月を出し給ふを
敬の法とふ

○星月夜の事
一星月夜秋也月まあるを発句ハ服のおるハ主殿ハ主殿にして
月の落ちハ他の事者故、ちと張、なと矢名の月をすし事秋とふ
ハ星月夜の月ハ〜ハ事也
一月次の月ハ異名の月を作る也但月雨ふまさ〜ハ月とかるて

書ゆへ月をはなすなり古歌なり

一九月菊月霜月長月ハ八月の名称なるなり

花の事

一花とハ草木の総名ハ花ハ三春百花の魁也

一昔ハ八品の花有て梅の花なり花なりといへと我国に於て桜なるべし

梅ハ春也但夏花花橘夏の白花也第葉に花を結ぶ白花也

花火ハ秋の白花なり餅花ハ冬の白花也

一月花春也花紅葉ハ秋なり白梅ハ冬なり

むつ月雪月なり

花紅葉ハ新古ハ大和歌ハ春ハ秋

一世俗ハ立春ハ梅ハ立春の紅梅ハ春の花

立春春の始なる也

一初桜の花宗匠ハ巧者の者也

一一人一花の事

葉の陽とハ花ハ生まれの事

開花ハ花ハ咲ハ世俗桜なり

ちるハ花ハ散ハ世俗ハ桜

開花ハ花ハ咲ハ世俗ハ桜

右二花一花のあ花とハ一人二花ハ世俗事なり強て言ハ時ハ桜なり

一桜ハ花と仮る事

幸崎の桜ハ花ハ桜ハ桜なり

山ハさくらとハ云る春面

桜咲時ハ仏うきようき

毋て寿夫の花を見面

前章ハ花ハ言葉の花を九ハ山崎と云ハ遠へ崎ハ幸崎山ハ

長良山也前の花と一体なるあ桜ハ仮の体ハ俗章ハ仏の脳ハ

して大概は世俗をいふ也故に雪月の花と格別なる事なれ共
とも也は例をハ花の白に櫻朝櫻等の実体ハ作ることの也
一箇條に曰花ハ櫻をあらはすなり櫻のあらはすものとあらんとハ雪秋雪也
柳花と以ハ櫻を柳として第花の花也仮令ハ百千鳥といへハ雪を初とし
百千鳥の囀りなり
口傳開之　百千鳥さえ来る頃ハとの毎年
あら世なれとも瓦を踏り行
発句之　唐土のよりしのハ岩に回せんの跡
口発句の初句の花の座を瓦風の文を山櫻咲ても牡丹と唐土の花皇
也櫻ハ瓦国の花の三也和漢の花也の野ならんとして花の座に櫻を
写せる也狂花の座のさとりの事を細なる事なり
開之花の影をとりて櫻花をとるとあるを櫻の影をうつして櫻花とをて
ハ譬ぬ也是等にて心得へし

聖語　あ〻寒の山の山寺もう山も
新樹ふせきしまるの秋を寒の山
いろの柳を世を成ぬく
雪の花の花の鶯花の鳴なり
前句を哥の言書とをて愛を方葉林の哥を句作りかをるを記
情の一位意方ハ下句も上へ同定強隔て位へし
雪の白河集に
林しかの松の雪をまる翠りの　風
さをしさハ柳　雪くと秋の風
是再所の雪をいふをれを柳と翠とのふ雪つの雪をさひ子
雪を病ぬるを也撰集を事世を海り一雪を三位て一ヶ位を へ雪を初也
雪かをる多
蔵尾　秋の夜や山をるの尾を雪の人

文考

辛崎の松も花より朧にて
前章の客の人とハ赤ら夫とふ俗語也その人遠ひとふ事歟此章
ゟ花屋ゟ初

時節感　猫の恋やものの関のあるあり月
行春や鳥なき魚の目ハ涙

前章ハ末鶏ゟ詩ゟ狂猿ゟ奥山に狂雲ゟ詩ゟ猫ゟ月ゟ花
のあり所なを枝ハ何時ゟかなきと問ハぬに
鶏ゟ詩ゟ猫ゟ月ゟ花ゟ奥山に狂雲ゟ月ゟ花ゟ猫ゟ月ゟ花
ゟ也その時ゟ猫月あれよ月もるき弦ゟ桃咲ゟ猫の恋咲ゟ
静ゟ時雨ゟ春ゟ行ゟ春のあ月新ゟ口ゟく春ゟ金ハ涙ゟと
時の人ゟ春ゟ春ゟ也
伝章も花咲ゟ春ゟ春ゟ功ゟ春ゟ
春ゟ魚ゟ春ゟ山川ゟ春ゟ新ゟ春ゟ也

歳旦歳暮餞別皆時節感也
蔵頭　又次郎ゟ月ゟ や 相の花
ゟ春ゟ此ゟ枝の草紙ゟ春ゟ春ゟ振ゟ春ゟんとゟ春ゟ詞
ゟ立ゟ春ゟ春ゟ春ゟ又次ゟ相の花の春ゟ春ゟ言葉ゟ春ゟ伝
ゟ也
後語の切字　いさらハ雪見ゟ春ゟ初ゟ
是ハ上の五文字の心の切とふ也切字とハ言葉すて居ゟはと
ハ云切字ゟハの字ゟ老人の友ゟ後ひゟ言葉の判読ゟ新ハ変ゟ
切とふ也

新て死歟　新年ハ死ゟ怪の多ゟ
是ハ中の七文字ゟ此ゟへにとハ言葉の下ゟ字怪のゟ世ゟ歟し
人ゟ無ゟ春ゟ春ゟ春ゟ春ゟ春ゟ春ゟ春ゟ春ゟ春ゟ春ゟ春ゟ
の切とふ

幸嵩の句を花より猶まして

これハ下の五文字の下に猶まして句をいくれあるを以て句の切れあるを以て
言葉の切れ目ハ上の五文字の切れとふ下の五文字の切れハ大なるまて
猶より猶と言葉の続らるれハ格調をさまる也

やをく〳〵と出て いさよふ月の雲

これハ貫嶋の詩をとりて十七字の中を二つにして作りたる句なり
中の句切れなり

人を見て貫ハせて京ハ年 京

これハ年の字の変ありて此を接句の切れとす

雑の句

鶯をなを猶まして かくれ笠

かちはらは杖突坂を駆馬哉

雑句の事和哥に雑の部とて定まる多ハ花月風雪用ていう変よ
名所よ雑の句許なり ハ歌書ハ仮名ハ仮名ハ書ハ仮名ハ

なるなるなる地名章ハ詩歌と相違なへ此ハ句ハ秀句を以て作
きり名所の秀句の法ハ此ハ歌書故実也後章ハ馬と杖との作意ハ雑
とせ駕されハ第人の身を警るの為用との事なくハ法用の事也

雑の部 怪年角如り初けよ源子明石

此ハ源子明石の勝景をあてはめるかをとふ作をと怪年
に角の上に留と書と書完の国ありて翁い決せるを事莊周ら
言ふよ狂源氏に源子明石ハを後るかと以ふ事ふをりて怪年よ
氏二家を猶用せをといふるハ当季の裏をかくはまりと成て源子明石
の作をなる四人雑の作とい作

無季の作 年くや猿の面

此ハ去と来るを来陽の源詩葉猿猿と去るとの字を花て二変
よ一ツの感を成せり句面に高季の句ハ人ハ作 たのつる第五と
作をなり 古ハ当季の作をいをた古ハ用をこいかを也を季を作

[illegible]の働きなり也

四季の花　七浦や[illegible]の領[illegible]一字座く　東花坊

[illegible]は花の新[illegible]也[illegible]南の新[illegible]

何の季[illegible][illegible]ても[illegible]付ふ働き[illegible]く四季の格と宜あり付[illegible]

[illegible]きき

右雜の句四種

置字置置詞に

置字とい七音（七音と[illegible]句を云ひ[illegible]也[illegible]の山の

山[illegible]山もとあり三[illegible]の山とあるごとく　習[illegible]

[illegible]

置詞ハ[illegible]事なり置詞と基俊をいふなり俊[illegible]

山雀ハ[illegible]也三條の山と[illegible]

一俳階會法式之事

一五段切字惣て一軸之事

一蕉翁三十三法之事

一曲節地真草行案方之事

一月花之句法并戀句之事

一置字置詞之事

以上

○戀句之事

詞の意をとらず情の意を[illegible]也仮令ハ神の[illegible]也[illegible]侍に[illegible]

此ハ神の[illegible]なと云[illegible]なり[illegible]とハ[illegible]の神の[illegible]

句もあれ[illegible]悲恋[illegible]也恋[illegible]句の恋[illegible]

[illegible]に附て三句目の恋句[illegible]

[illegible]きハ一夏ハ[illegible]

[illegible]

混雑より指切りたるを恋とあらて
物さしよ新内男のきこうかて
とゝふ句ハ恋の句を書れと是恋の句を深女房娘の句と作ル
ゆへ表ゝ許也

おっかさんハ内ハ女房
名も哥もはやく娘の百人一首
赤恥恋の句の恋をとるや
ふしやなら指ゆびかゝる
なるく初ゝる新内
是恋の句ゝ恋也表ゝ也
浄瑠を覚めく今覚ル脳
三十ゝの掛ゝ頃 珠

是ハ表ゝ書ゝゆへ也又句ゝ恋の心ゝれと略て恋と云事也

第の先にうりやとゝぬらひ
物ゝえゝ物ゝハぬふりの鏡面て
加格の句孫二句一ゝの恋とゝふとのゝて一句ゝ捨ぬ理ゝ手傳のく
ハ並一句ゝて捨てゝきと物ゝふゝあやまり也叶働きゝゝハ一句ゝて捨て

○ 昭の事

昭ゝ西野文野の習ゝ西ハ詩ゝ入り義又定の心ゝて賀句ゝ
ゝ物ゝ余情を翠筋形て調ふ型し或ハ賀句三月ゝ多ゝ春
なと覚束なくも出ゝハ主人余情を守定め又ゝ発句主婦ゝ物ゝしゝ
なゝゝハ拙西山川の器を定ゝ也

西野　山吹や水ハ流れて とのゝ軒　乙由
船行ゝうよ まゝ 雲ゝ ゆく　芦丸

水ゝ流れゝゝとゝふと恋ゝ書ゝ引と西野ゝ也
文野　本拙と一ゝ体ゝ柳ゝ

丸雪にたゝく水鳥

柳ハ体なるゆゑに落くとも交せる也

此外流々心得 様々拍子言葉附さまくあれと此二体にみなかよふ也

手爾於波あまたありといへ共一句のやうに書へきなり

いろくの花もまきらハし春の草

うかれく蝶の目に覚えしぬ哉

是草と蝶を対すへき也 此句

古格よ鳴ケリ 飛フと加様に言動く文字あらバあまたといふ事あれと今

ハ書様法なし

○絶章之事

古池や蛙飛込水の音

辛崎の松は花より朧にて

あらくとりたる綿も杖の風

道心得の末様ハかるゝ吟れけり

去年もまた気色とゝのふ月と梅

蕉翁の三絶　右是絶章之

○追善の格の事

凡追善ハ親疎老若男女幼少即今はかなき心の句作にあらはすへか

らす

親の部 秋風に折れて悲しき桑の杖

是ハ於今気聞を悼給ふ句也 悲しやとあるへきを悲しきと切字入

まきらはしも追善の一法にして哀情の深きもの也

追善ニ切字用ひても情深く親師兄弟の時切字ナしにたる事なり

疎之部

老医のみまかりけるを聞てあさましと申すとも追善の句をとしよ

六尺も力おとしや五月雨　其角

老之部　蓮さきの笠や落るぬ旅姿　乙由
若之部　空恒や天にかゝみの薄霞　茂矩
男之部　梅花をくゝ新酒き水の匂ひ　春波
女之部　手向にも其新ぬかて女郎花　茂矩
幼少の部　紅白の花を抱けるさらさきき　春波

追善とハ亡人の善を修る事ハ仏菩の匂ひ　曾比

青苔の太祝ぬけ出る蛙の声

追福ハ亡人の冥福を祈ハ冥途ハ雲の花

歌の情を述る也

淵さやさに蒲鉾も茶せら作る　其角

一話絶句況し閑居きの言葉無いむ〳〵

一芽花をと書京経冊をきを信也〳〵ハ石をうち日をうの経長なら

ハ花をきを上と花水をと上ハをと上ハをて書〳〵

即今作例

風の寒りくみ〳〵や枯水も高の人　宋雄

遠志　責林十三年春とりこ　於金城

山の端に月の後とやさきら

是酒を新菱川花雪師の名誉を演る也

○茅三の章

才三ハ三の情をて悔をる也猶を首句をくゝめ才三句部位の形り曲節

地謡形の句位ハ也発句真ならハ行ならハ真なと句を作る也

ロテ。ランロニロナレヤ若の句ハ発句真なるもをとふ句との曲節ハ要なる部之義

をを句を若をて句ハ発句をなるふ句也又なるのを句を若をを句

若る事ハ句四句目人なる也不句ハ曲節あるとの也才三ハ一世一節也

発句形句形り若句〳〵て句の才三をて句の事〳〵

式句の発句ハ才三をて句ハ押字ふくと付ふ本〳〵擬をて長閑をて

陸奥まてあとしてよし伊とまゝ八静かなるといへ共
発句を通ぬ句発句ハ句かゝらず発句ハ句ハ
の上にたゝと字を置し減ずして盛りの類ふる事
しく面の中にたゝ多波入事を忌しの上に置したゝへに
して殺しの類
又して面中に多波入不支字の下に置と云へ歟

○類字面之事

冬の日集に

寒月に洗ふ曙の雲の色

冬の狂句の言葉

撫松山の松を本歌

如形まとはふ物の類字の侍のそし を對と言ふ事
古格の松字五月雨を忌あるを動ぬ文句文字を面とふ事
ありさゝと笹の小笹も雪の小笹も限る事なり

○四句目之事

四句目迄句初り今の侍まて但法師の
人て殺いへと云へきを人ハふゝと延しまて四四日の工風也
三ハ天ノスウ四ハ地のスウ三ヨウ傳しテ四ヨウ物ヲ産ル秘事より五句目地句今
釈の初まる而也六句目ハ地の句七句目ハ月奇異を好む可良月の侍制
より八句目月を為ふ事枝垂柳と知る一一歌仙行の時五句目地の
初り也

三十三法之傳畢

連歌式目ハ人王九十一代伏見院御宇建治二年鎌倉藤谷ミ
為想卿作之又一百代後圓融院御宇應安五年兼良卿追加作之

百二代後花園院御宇享徳元年今安百五代後柏原院文亀二年牡丹花ニ勅定有テ又作ル建治二ヨリ宝暦二ニテ四百七十七年ニ成ル宗祇年限二百廿九年ニ成ル

俳諧歳元　後土御門院御宇山崎宗鑑文明六年ヨリ起ル俗名支那弥三郎文明六ヨリ宝暦二ニテ二百七十九年ナリ

別傳

翁傳書

一古今序傳　一百人一首秘聞抄　一連歌新式書入

一堺木ノ傳書入　一白馬経廿五ケ條

翁撰書

一猿蓑集　一續猿蓑集　一炭俵　一曠野　一春ノ日

一冬ノ日　一ねくのおもを　右七部内　一夏ノ日

明和三初冬自桃翁傳

梅花傳　発句ノ巻一目録

一剛柔之傳

一十八句法之事

一五段切字懇テ軸之事

一明鏡白砂人集大略

○剛柔竪横傳

抑発句と云ハ月雪花時鳥にいとつゝ類句等へ句作ゝ働を以て其
草行六義十体さまくとなる也然るに其題ゝ剛柔ゝ成ル類句を剛
柔あり夫を句作ゝ雅俗を味ふる事也剛とハ横題ゝて蓬餅晒布煙
拂踊の類也是ゝ雅言の柔を凡就制有ル柔とハ竪題ゝ見立花物名
の類也是ゝ俗語の剛を凡句作也

竪題ノ法

「俗也剛」
「竪也柔」
ちゝ〻ゝ 死母 柔 柔 ゝ 見へ 蛍 ゝ 蛍 箱

俗語の剛を凡制有ル也

横題ノ法

「雅也柔」
「横也剛」
花ゝ名ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 月 ゝ 雁

雅言の柔を凡制有ル也

題ゝ類句とゝ剛柔の法

「剛也」
「柔也」
「雅言」
「俗語」
ひとゝせ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 芋ゝ ゝ ゝ ゝ

文考

如(俗語)きつるもその類(俗語)なくもや(雅言)者(詞)の言(詞)

芋(換語)也(漢)素(漢)者(詞)と題向の景也芋の子と如と俗語(素の言也)や雅言

支考

して製作する也

題も題向も割雅言ヲ以制れ

全(推言)ずして(雅也)託(雅也)の和歌や年(雅也)

託(雅也)の和歌ヲ年(雅也)古も同様にして割也そこ全ずして雅言

して製作する也

題も題向も素(俗語)語ヲ以制れ

寄(素)や柳(素)ずして(俗語也)毒(素)の酔(素)

寄も柳も素と俗語にさまたの俗語に制する也

心詞作法

寄(心)ずして(詞)ふ月と柳

衡と云る句調を云て仕秋俗也世俗ハ百銭の地一ヲ云て一年也

則素雅俗ヲ平ヘて発句も俗句も言形言葉と云物也

題と題向ヲ作ル法

古池(題向)や蛙飛こむ(題)水の音(題向)

題ハ盗也題向ハ借也 け盗蛙ヲ借ル俗ヲ形也(一作ル盗蛙ヲ形)

題向斗ヲ作題ヲ調ル法

卯の花(題)や暗き(題向)の柳(題向)

題向ハ柳の暗きを云て卯の花の白きを以調たり

○十八句法

真法　柳しろ桜ちる山籠をかけ也

(三十三法)あるくと見は水ながる秋の風

風情して情ヲ姿の調物ヲ

行法　梅ヲ香るの句と日の出る山路哉

風雅ヲして雅ヲ情と生ル物也道風秋風ハ行一体也

草法　言情も花月の句ハ七ヲ雅

曲節働キ　一作ホヘ〜　従三献九献有筵の整ふ〜しく
年を経

蔵頭法　又海上おかはの子や相の花　支考

清水物言松の音寂しき霜の朝ぐらの水さへ冬ともなれば
桐の花も咲きぬ此の世の名残とは言ふ人の言世し相をのこし又
海上を冬ものしろく松を寄せ古寺の鐘ばかり用ふる色

蔵尾法　秋の秋や山々の尾よりの人

人行く女房の文まさして言ふ初也花の五文字の下に連
き初をのこせり

句對法　菊いろく菊花の香　菊

色と香と菊花の香也

意對法　死もせぬ旅寝の果や秋の暮

元流男子の英江戸を立て美濃大垣柳瀬川を渡て晩秋に

宮對法　秋の雲を踏くの月の雲　秋の雲と旅衣の黒と雲を対せり

庶子を入て鄙人やまうくに

まうと入るとの字を対也

互照法　水仙や白き障子の内　障子水仙ともに白を互照の働とす

水詠法　御命涼や池のうち　池の水を涼風

日蓮上人の真筆に大根を固女郎宮を伝法蓮華経廻向
申候と有を詞を正しく用ふ古哥古詞を用て作

現在を過去と想ふ法

ゆくときたる四月八日毒の花盛

三十三所ニ
盛人に逢ふと切もあり笠の内

夢ゝ和尚言ふ八幼天場花盛りありしを今部屋の内ハ
初夏邪のもの盛りとしさ名残の花盛り　哀と

名多花の如き物を題として作る

現在に未来を想ふ法

元日や田毎九日こそ恋草孔

芋種や花の如くを蒔くあるべき

花咲くの如くして法月を四五芋種を蒔く事をいひて用ゆる

蒔を祝ふ

結前生後　山里に芋蒔くしー毒毛

山里に蒔くして万年の寿をもとめしと為て結ぶの働也

白梅の咲くや迷しと一字為言の働也

双関法　ひとりなく中の梅ゆる和歌の如

中七文字の柏子に寄せ少仰の和歌ゆる俳書の歌論を

鎖詞法　名月や湖水ゆうかぶ七夕（鎖詞ゆう）

月と美人と為へるい和漢共に寄せて大はせ浦五美寄せて

十七年を隔へて深川の漁翁の月を俳と合して法

ふと作る也

影畧五題

菊の如くなる月と雑波ハ宵の月

影畧ハ影畧の如くなるべて用ゆる多くハ賦の体也

影菊ハ月を如くなる月ハ雑波ハ月を如くなる雑波

の如き菊を対し菊と月とに俳仰ありて菊の白月の白ハ言

外に生る也古言とのなかふ助字を対ふ

引縄貫珠法　梅若葉ちるの宿のとりて

時の体ゆうて三方の義を為て一体とせる也三段切の一名と為る

へしなきてなを東武に送る縄ふ日也

及襲法

卯のもや割き柳の枝よひこ

古領の卯の花ハ作りて柳の今きに寄せを述べる也柳ハ今く

花を卯とハ禅語なる又卯のもを懸く柳を立し俳及唐也

錯綜顛倒法　是ら火を木〻の色や花の宿　支考

木〻の色は是ら火を花の宿らして花々と点ずる変へて作るなり

詩哥を倒せしなり

香稲啄餘鸚鵡粒　碧梧棲荒鳳凰枝　杜子

逢坂の関の清水に影とめて　世貫之

如斯なるに依つて詩の気象哥の作法俳諧に用ひる文と変

して来る作法なり文とは字の句を百集して透行せる

法格を弱めて俳格と成るべし

三十三法　三十巧　文月や六日も常の夜に似た

十八法終

○五陵の切字他して一抽の事

切字と云事は我朱よりは切と云也字を所の名と云る一一抑俳諧は発句と

切字を入る事以ての外なり和哥三十一字にて文字動も多き故切れ

扱ひなきと也此外の哥も切字なきとて一様なる木の下陰は言

かるし言ふ知らるあり言を除きかゝると云ふ切也如斯連哥俳諧の

発句を切字の入るとは上の句下の句と多数に一句二章の発句と成也

和哥の上下の句のごとし されば十七字を以て三十一字の格理を云へる物なれば

切字のあつて中一也

○心の切の事

上五文字切　いさ知らば空見まほしき家もがな　翁

いさ切字なり句はさらばと云に但しそと切ふ也元の

俳諧なるに空見に行んと人誘ふ言葉なる切なり

中七字切　折て societ 枝の人の立ちたき立と花笠とも云事なり

見へたりと言ひたる人の立ちたき立と花笠とも云事なり

嵐山後日もんも幼花されば悼の赤きまり雪ふる花て咲ども

折て其の花の変はらぬ事しきりと実は変化

の観念しとる情を切なるを切なり

下五文字切　辛崎の松は花より霞けり　芭蕉

霞まてと云五文字のうちに松はあるなれとも其の初の意を知り

とりつる所なるなり也

中の切　やまくとくいつるふ月の雲　（雲イニ）

あるくしとおもくいつるふ月をしたる情なり

十七字の中と今月の初の月　（倍の意　やもの）

詠まり然を言葉にて文にても叮嚀の分明なる変也

切とする也

接打切　人事を賞せて我が年忘

二体三用の働有て人と人との自然の情を也云ふと

切字の理なり

二段切　言魅し言也の詠し言の年

言の切の一体を言魅言也と結末快歌の観意を兼ね

一体を二体を用ひて深なれは二段の切と言ふなり

月を若葉山ふかき初つ不　素堂

月若葉を見て耳を初めるを分　難吟を三解言葉を

して一体とせり者の三段ハ

初句を言の本の体を併せ岩花

其の初句の一体以て二体を成れハ彩なれの二段切也

君火者ケ去ケ物を也ん　芭蕉

三段切

人ハ去者ケ去を重ねと春二月の鉢言切也連哥之

二字切

打人を花ようとん風を年　其二字三用と人と花斗の字ハ成る

三字切

なるなる春鳥啼き飛ぶん　芭蕉

三字三用の働也云も花も成風やとなんつの年其切

三字切

字を三所に入れて別れ分る家

言外切

言外を言の分月と梅

あくまでも誠を専とし　秋の風

[illegible]

強く人に言葉作りもしふべきなり若し切字なくして唯一切の風の

句も目の句も共に物と心言無きにて切つなる言別あり

貴賤を問ず月の全体を吉今世に曰く月々日々あれども秋風ぶ

あるべき秋の朗詠と云へしまた附合の手句あるべき句創の風

業の全体を合て発句は唯一発句なれ共乳母の切も言

（中略）当て学べきことあるべきたる敬して学ぶべきなり

切字交るのみにて神助の妙法と云ふべきや連歌に松尾芭蕉翁

相の未押詠ぶ拖塀の内　翁

にて押さるると云てにはとあるべきと曰べきなり拖字なり

青苔拖あるべきなり

月の題法

於題の法

[illegible]

大題法

[illegible]

[illegible]

注に来る友彼今宵の月の姿

あ[illegible]無花の日の光

春彼曰若し切字なくば若無も日の光を一句の角

作れば初の通を云也

春彼曰総て発句は五七五の差別なく切字なくも体格有

夫るあえい歌家の発句を定る也

白砂人集に大略一切を無切字若細川幽斎曰連歌の大略一

切字無作爲一作と云て益なし切字は必

出し人なきにて四季かり申候は仮用一切字なりの発句

作爲せ人推量なる[illegible]いまに作法も一切を今は大事な

述作接ある也初句の中に切字なりの発句は必作爲

五ケ月に成ると也 実通の意をもて初心の人仕受とする
抑切字の発句仕受とする所に成ると雖も其事とく事なり
五七五句法の意別の事也
十九手を指違 花をもて（もれと言葉つく）植へき植に成て
花をもて如植へ居きと言葉書きくさ心所也 花をもてと
言餘の言葉はきと十九手を云ふとある也
下句 障子の月 月を云くとして
手面 違字を山とも入のこゝろ
月に花を詠る花上へかゝりて全体をふくむ也 第章に
月に花を抱渡章に山とも押えて通ると也も押る推字の
振也
此ように三字上へ入て手を通る（ハステ） 通るこゝろ
みりの如き事

畢如
不如
隠如
ゆるんと通て思ひ寄る心の意を手指也
ゆるゝと通て牛蒡あり因花押る所
ゆるゝ通る所せるゝ所也
所に陸奥国通ふ千鳥の鳴くに実地真実
須広の意也
見る所
秋の籟と又頃情 見て中
見る実也を意の上ウケヌフヌフムユル此手指也 ヌ通る
梅
ゝ面
梅 ゝも手指 ゝく
大方上句に世の事と変と有下の句ゆきい二ツ意面を
入る所に成る面也
鶯聲にひよこり上戸 酒を
鶯聲
四面の情 ふくと こゝて

是上の句にても大くたちきりあるとも上の句にても取付なし
事するまへし云ふ叺と言葉を除く心得也又上の句に
伽羅切て待くて居る事あるまいぞ
是もら好と除る也

下の句ニ有事　雲雀ハ上たし月の雁の行て
七字くと言切ハ有事也但いくつにても
きたよの三字上にあれハまた留らず

留留
麦の秋も　様よ　ゆり　哉
みな押字の手になし事れハ留るめ也但いくつにても

五段切字終
かハありかな有り　ゆきへ散る筆の雲ハ花ならで
ゆきよハ散る筆の雲ハ花ならハ
定りし事ハかも　不定の事ハかハ

○明鏡　白砂人傳

夫和哥ハ神明の内證佛道の妙理也人皇十二代景行天皇ノ御宇日本武尊
新治の筑波を過て幾夜か寝つると上の句斗を吟し事より始り伝ハ皆ハ火方の天の
浮橋の本にして陰陽の神あひぬるの業ありしよりなりとも世人説の事二神
の神詠三十六字の内新治の発句の極別なて　其後年より此道に執心深し此
一巻ハ古賢連歌の至極を記し右よし天正以下の頃より三井寺にて浮橋紹
巴の云伝へし所を此筆にて集めて秘宝にて露となるといへとも執心深き
ゆへ爰三ヶ所にあらはし汝か宝とせよ人にあたへさる事に伝る事なきの外
一発句の切にて様々の習ひあり切字の内切字といふ所と云事の極を
一ましを落居の外二字ハ数外云ふことに添外習ふとに河外去りまた現在にて
と云是也現在の所とハしの字にて切て又外と留らぬ也世話にハ古今列云捨ハ
ひまもらぬ切ぬとても曲節あるものハ発句とす極し
山ざくし花の雨へ暮らふ云ふあくぬ

遠

そもそもかの文字を書てあること

あるはそもそも墨をふまるる歟

其限五のことなれども出ときたる歟今一つの

大切の秘訣也

落葉哉 遠 俳

富の位義〳〵書るつる歟

顧哉 仝 仝

かくきたるこゝろ

空哉 仝 仝

梵摩 よりたる 極 訳 文 工 る 歟

況哉 仝 仝

本花の方 は 牛 乎 似 る る 字 る 歟

世隆 ましる〳〵 字 る 歟

世の中 を 知 る 字 る 歟

現在哉 仝 仝

あるはそもそも墨をふまるる歟

雲雀 より 休みし 時 る 歟

一やとこゝろて引と云るこゝろ歟

もとに合のやうに云也 又 信 者 や 達 抜

やはり雨や雨月雨やの類は花所の雨やともいふて

雨也 但し 梅 字 花 字 也

抜もあり 此 多 くは 切 字 ふまるる 歟 又 此 詞 を 切 字 ふまへし

遠 俳

此雨きや 字 を 抜 きて 字 る 歟

や 歟 や 抜 る る 字 る 歟

なるかまりて言ふ也 故 に 歟 也 歟 も 歟 也 歟 章 字 を うと 梅 字 者

後章は 秋 と 花 字 を 用 る 也 歟 章 字 を 梅 字 に 合 の やうに 歟 と

用るは 梅 字 花 字 の 論 を 第 九 と 疑 の やうに 此 詞 を 用 る 一 論 用

秋 と 用 て 切 字 を 改 る 也

三ツ哉之事

三ツの哉 流 流 まま〳〵 あれと 我 家 に 於 手 哉 字 別 是 那 は 流 候 の 餘 字 也

古 抑 は 七 ツ 八 ツ の 字 あれ と 云 三 ツ 字 あ る 也 佐 定 定 月 ば い 疑 詞 と 稚 美 は 遠

へり 変 を 化 て 和 漢 の 通 義 を 交 て 哉 那 欲 那 手 那 の 分 別 あ 要 〳〵 三 ツ と

は 佐 定 と 稚 美 と 漢 唱 と なり

春日 立 てまくまれ ら の 野 山 の 花 佐 定 也

木 の もと は 什 も 勢 ま さ ら 歟 稚 美 也

梅 ら ひて 和 の も 相 む ま く 歟 漢 唱 也

什 歟 は 流 立 く 立 ら る の 哉 ら て と ま ら ぬ 立 て と ま ら て

けふらぬといへる其中のかせけれ共の手爾はにとゞまるへし　うたの教ニ
て上より云ひはなちて切れたる又切るなり

俳　たのはみしや鳴浦かけて涼見船　八重

日　撰其角集に夕涼とあり如何

一やも哉と同体にて口辞五体の習あり

秋葉ノ哉　一と体へあれまも山のさくらかな　涼菟

歎息哉　打判に浮世の埜の旅寝かな　春波

治定ノ哉　抱付て湯井の上に月見るかな　涼菟

治哉　番所に栃の少節を引き寄せて
　　疣瓦山は月さへそる　かな
　　於治流外此哉世の句には外に切字有へし

秋葉ノ耶　花守や主もとおもひそめし徒　涼菟

歎息耶　死もせぬ旅寝の果や秋の暮　翁

疑ノ耶　柏葉とのとは木ぞや太郎月　涼菟

口合ノ耶　咲やけ梅を越波の橋の友　仝

○切字ノ事

一哉もをな　や　ぞ　か　めり　けれ　ぞや　いかに　めや　もなし　かれや

右何れある切字也上手の句に手尓はの如し

現在ノ切　連　雲きらし山なかくも峰の雲

俳　秋よいし梅の山後ハ照せとも

門　連　房の内秋さも　雲の山

幾　仝　菜ふうきり秋の旅の雲の山

奴　仝　秋更ぬ松の起あらし　時雨丸

ぞ等ぬると切れる也前段の体に有

連　忘れし友神の昔と雲の花

おの字にて居ける事也これたる神の昔ぞと押へて

幾　連　家もなく　あの高の神さびから

いきとも云　弱に侍る人へ知る也

伊左　俳　人は不知人こそ　柳さくら哉

いさとほるときハふゐと書也　歌

人は来ぬ　さくら　十花　花むしの　秀句　春之

宗菊

誘　俳　誘さくら　みちのくの　さくらハ誘と書　歌

いさといへる　心の　誘

伊勢物語

花見　連　さらハ世　さくらハ　なるさくら　ハ　さくらハ　さくらハ

俳　さくらハ　さくらハ　さくらハ

旅　連　四つ　おとらぬ　世　桜字

耶和　仝　都やハ　ふの　竜の　峰の　桜

やハと云　手毎　伊勢のうら

人の心のあるかやハ　あれやハ　あそと云也

其の花の　あやハ　花を　春の　花香やハ　かくれ

かくれ　花を　人へ　也

連　月細しかくや　春りかくらん

後ハ上の疑の字なれ　れ　ぬ也　されと疑　何　れハ　ハ　也

又ハくの光のとけき　春のひと　疑の　ハ　花の　くらん

春の日と疑の　ハ　也

芭蕉之　連　折人を　花を　風　疑

俳　時雨　外　まを　くる　乙由

是ハ月を　所　て　事也　芭蕉　の　句　も　て　て

も一世一句　也　外　る　詞　市嵐　よ　の　類　所　上　の　句　南

又ハ　切字　句　切　切　む

あたらと　春日の　みちくも　陸奥

十類大略しるして俳先達格言くさぐさを唯一定別の事なきよう
そのかぶいは其外切なるべし

一席地の法　行春を江の人とおしむ鳥

大略俳諧法記録と経験とを幸山の地の働きて詠ぶ
尾を閑をもとし尾を閑をもとし付法狂文章を用
ふる

俳諧を家を立出野の景色俳諧を秋の蕭条　秋の夕暮　良暹
俳諧を秋の蕭条と詞つき秋の蕭の心をもとしてとかるべ
し事也

名月や座にも置かれぬ手まくら

詞中の美の字に異ひまあり其人の位あり
望むと云へるも月のなるを愛を詞中の閑雅にして工面に
唯花は師匠花は弟子月の義に身をもやつし

三十三法ニ
閑雅

笹や住むかくれいほ人の名となるべし年用能菊の達磨と
ゆかしき高せしるる也

蕉大家三十三法

白法四格

面白味　木のもとに住けも鶯もさくら哉
三十三法
梅ゝ香るのつとに日の出る山路哉

淋味　古池や蛙飛込水の音

可笑味　已に我ふにかゝる庵ふきく蛙哉

時節感　前三十三法ニ詳也

常見

脉格二十二法

即興脉　むらし竹秋父殿さへ角刀不
その中の音曲節をして一住一興を言捨也

盛図脉彩色　俳ゝ見ともに仏格ふ日ハ義と定

粹結ふかくこゝろを狩たる風流

扨て世流の白餘を書海を定とす故世弾こそ八箕笠八泊

さらに餘頭賛八芙川を行世俗をうかゝる船を船ヶ岳

山体の全ものとす

句讀格　春が来ると山夜の中山うて深夜

かくのごとく下三字よりて言葉をうる事也

進善格　枕風ヶ来てうて悲しや素木の枕

前三十三字に垂し親味あ枕アリ異

野琴風ヶ吹て見しやまとも春のへ　春波

遠忘山の陽ヶ月の後とやほとゝぎす

進善苦乐の本縄ぬけきり悟りのあり

武文　前三十三字に垂し異

異字　ちゝはゝ七年と七堂伽藍八重さくら　多

異語　屋敷ヶ屋根せうとの床の山

山寺の年賀会の雪ヶ垂ー

面護　日ヶ暮ヶ雲ヶ為も空のあーゝ

悔むべきものを助ける家鶏これ院言不極

変態　ちゝとくゝこゝろ仏世ゝゝ

芳地山ヶ多入り世上へのとくゝの仏永ゝの空也

雲行奇とくゝの岩ヶ山ヶ岩ヶ仏仮不ゝゝなき位ゝ

疑の体　ことゝ里ハ仏ヶ花ヶ月のヶ

花住の春ゝその匂ゝ芝上東門院より南内先生の家ゝ春ー八重桜

と遊ぶ春ゝ大虎時ゝ春ゝ春ゝ春ゝを却て無ー給ひ

花ゝ春ゝこゝ花住の春を丁ゝ小ー也

面白く扨て かゝるー き 粹ヶ船

撃要　かゝるー き粹ヶ船ヶ春ゝ花を実ゝと偽ゝ也

奪胎
換骨

賢前三十三法に委し畧

三十三法に右明も三十日に近し餅の号「ありとたよりに人に知られぬ夕の星や三十日に近き月明の月

翻轉

前三十三法に委し畧

大直

まことにまくなるの野山なれ
云春の景色をそのへたるなれ七日をこの義成もきみて八日も
あるを九日といへる陽数にて旋きぬ九日の明月也

造化を人の作業寫

軽生て発句書し　五月雨
五月雨のだい芋木盤等て日数つきうつくきるを地の
形をあらくと絵そへうこうこうこう

一巡一文

振賣の所作を弟子に奥しうる也所の景物を上句に書
さ形を隣国と写生を書とて一巡一文を元さへし
父母のたまりを意し　短冊の多
言語まての以うにて日月を父母ふの三ツ方四ツを景物絵
をかくなるゆるの今流ふを八重風秋中の我也

雑体

知らぬ法に沿ふと　仏

前三十三法に委畧

雑の体

かくつくり角振りけよ東方明石

前三十三法に委畧

無季格

前三十三法に委畧

四季格

前三十三法に委畧

躰格　二十二法に委

○梅花集附録吐露金風傳

支佛儒の法席に優あるもの一達磨の教を見て宋に達磨の教を運へり我邦にて古法の眠をさまして一切の心をもて海内の人民を導き佛儒の宗義を講ぜ諸徒の問を答へ法を示す三教あれ共儒者の撰あるさまよりは十哲の先達出来て教部を徳を慕ひ其風を望むまた儒も家度まもて人を導く変をなしにて此をあらそい或は二仏言ふ所或は自修放言に或をなしと或は事物の中にて自己の一法を要旨なんと考きらかに求ハ各義を学ぶ一放下の言葉を以て人に教ふ其方法の苦の事物を示すを以て宗旨となすなり元人爰に来て外に言ふて仁義を説く井の蛙の彼を上る論ふたらんとより梅花佛や十論古今物を捉て目のあたりに花の開をそらしを徒九鼎に四海を知り情を知へ此要旨も今に七百年の昔をうぬ九七年来ぬ所にはかしこまりを暇くに四方を捨て一宗の法をそふとゝへとも文質を兼ね狂夫の行者の風俗に拘ふ人たらんとを図新まの九をうて手数年の管見をうて若き人に一高の七百九十文の所を仰く

発句論

抑我国の歌とせる和歌の心を尋へ柱陵の間にたゝ風庭雅実にあるを給ふ中故事を詠ふ者の類向の歌ハ一方古来易とし分の間一時流行せさるこゝ作り海情をそへ深情の作をあらゆる地物を他の流又ハ事物の景所と先象をのゝ奇怪詩をもはとし利をあつ流又ハ類向の奇を出しを伝ハ始ゝ世の今の流行と天地開しより春夏秋冬花月雪の中に五論の変ゝ衰ゝ衰ゝ行ゝ言ゝ人百言語の尽まる人に眼前に取を初の安に向ゝ自ゝ物にて人百言語の尽まるゝ一ゝ風流雅詩異横別系の然割えあるゝ共ハ言ゝ三ゝ尽ゝ又ハ一ゝ詩ゝ二ゝ取ゝ尽ゝ一ゝハ言外の全体ゝ也君ゝ言海情心の心ゝ菩の何能耶識也神ゝ尽ゝハ地ゝ訓今年の初ゝ儒門にて毎極ゝ大極也甚

元亨とゝ者て陽詠に陽詠すゝ情ゆゑ也然はこゝろ上に海情
も有名と雖君も上て花も寓物の間を伺へたる一種ゆゑ也かの稚すゝ二花ゆゑ
也一枝を生し花実をもたゝ也寓ゆゑ海情を生ずるゆゑ一ゝ未やむ事の
俗情ハ生熟の比興のゆゑて心情風雅なるの風雅を保つゝのハ心ゆゑ
神也情ゆゑ一ゝ生情ハ我ゆゑ内ゆゑ情ハ乱ハ先とて海情の一つを抜ゆる
ゆゑ物の風雅を乱ハ物の風情をゆゑ也ゆゑ文ゆゑ教をゆゑむる文教ゆゑ
働ゆゑ一ゝ者ゆゑ菊の匂毎に保を放ゆゑ変ゆゑ情也き

一吹ハ　あの山　紙の　花さらり

吹ハ情ゆゑて　あの山　眼前の海也　言ゆゑ山の花ゆゑて　一吹ハ　との情ゆゑ
あの山と海ゆゑつゝ　ゆゑと情に入花吹ゆゑ海に出ゆゑ海情の中歩くめ
俗ゆゑて　ゆゑ物の情ゆゑ

○六俳文事

文今物ゆゑ歩く年あゆゑ哥ゆゑ古文ゆゑ立ゆゑ和哥ゆゑ古今物の自ゆゑ今俳諧の

名風ゆゑて花のゆゑ　三十三伝二巻

風　梅の木に狂金ゆゑ木や毎の花

古今物に風ゆゑと訓に意に有く

雅　ゆゑ情ゆゑ実も寓ゆゑかくも如ゆゑ

古今物に正ゆゑと訓ス雅ゆゑ正ゆゑ心有ゆゑて

頌　何の木の花ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

古今物に祝ゆゑと訓ス祝ゆゑ美ゆゑ心ゆゑて神仏伊ゆゑ祝ゆゑ

賦　梅ゆゑ葉ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

古今物に賦ゆゑと訓ス数へゆゑ世ゆゑ海情ゆゑ述ゆゑ

比　不知夜や　ゆゑ花　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

古今物に準ゆゑと訓ス物ゆゑ比方ゆゑ

興　面白し　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

古今物に誘ゆゑと訓ス興ゆゑ事ゆゑ物ゆゑ托ゆゑと云

○五儀之事

五儀とふい五の月を花芳一ぎを調ふを云也連句いまを上の句三句を花い
其義を三句又会（きも也
簾席題曲流「五月雨やこくら橋山のふもきた
地月つゝをくも呼高る二の邦
時鳥あり橋くふや水の上
五儀歌の句をも其言葉を上句の体会又会へきら之外和歌に
之ふ句変換く点と宴王一理万通也へ

○十躰之事

十躰の事古へ哥仙達の撰給いて庭刻とをかりさ花も其名を知る人
稀也其と此十躰を立しハ哥流人とも始めもまの之たかくまりて悟る躰い
此ふ句ふ躰ふ躰く躰制花を抜さんとの数多躰
遠玄躰　あらくとりたる躰ふ秋の風
有心躰　ふりて弱ぬ家居ハ人ハえへに憐の琴
なのうへるまくはの躰やあるかんうと又よそ今ふ急しき
事遊躰　山里と百笑おそし春の花
年へ世るう流の橋るまとん家世そ水ぬ水のみる上
農体　清流や波ふうり辺まる松ふ
鶯ふ宿て入江の庵風ふ在を波寄る秋の夕風
見様躰　ふ之の木樵そ高ふ会ふり
村雨の寄こまくしぬ橋の松ふ上哥ふ之の行る秋の夕雲
面白躰　名月や池をめぐりて松ぶの
人住ぬ石垣の刻風の板底あふ　訪ふ寄く秋の風

濃脉　十六夜ハ月つゝみ間のたしあり

月見ルとてあつまりて也一事ハ成ハいとゝの秋はあらぬと

一筋有脉　四一枝植て立さる　柳一　永

芝居の山より出る月見んと人まちいてて月をうそまて

鬼拉脉　六月や鯛も鮎もなかれ塩ゝ

ゆきゝ出よ涼ゝ寒事のまたうんきふの中の次の山ゝ

◎姿情論

姿情の論ハ十論ハたゝさ此て姿先とし情を後とし古今の序又

もとゝ和歌より和よ降りてとあるハ姿ゝ哀ハ情也ハ解前の系

を以て之心の実を書とるゝ心風の習なるへし

◎花実論

花ハ文ハて実ハ質也花ハ姿ハて実ハ情也姿情前後を透徹へし

金毛要語

◎発句

十論曰発句ハ大極の一言にして虚より起りて実にとゝまれを本より

理もなく理ともなくして活もなく或ものゝ事完ハ信の一字より言語

ハ若人と初心とにありて上手の手深ハ論なるに及ハ其もく俳諧の工

夫とハ我宿ありて枝を傾け甚事なるぬ梅山数水ハ人とくの和ふ

ものも虚実のさゝひを心ハ意外を赤多の理ハ他人の理ハ

他人の理ハ赤多の理ハをもて論議ハ人をさとゝ論ふのとく

出ものを以て四民の情をやハらぎ事出をもて出論の法を掛さ米一ハ件本を

獣の若をもてハ風雅ハいのむ風情ハいのむと平生の心ハ若人さらんまを

俳諧俗行の人とハ云へ

寓牛抄曰発句のとハ故翁の本世ハ信ことをのゝ実情を失へ今を

問て之世の古名達ようもの変化の花ハ若人ハ風ハ変ハ俳諧の時

世話ものゝ戯作にしてもなほ俳句も最高の境あれば陶句の情趣
もかくの如と花月雪も元はなく調の理解なく

春波曰愛は発句の趣向おのの拙を恥あるべき古不易の体を保ち
を目を驚きまきるを要をたるに故翁は老い今の眼界を者今の姿うの
ひて芭蕉を信ずは依まり故は

春波曰愛は句作のそらき（三字の掛ひ掛）て一時流行きる拙也
時翁の他のたのあるをく句を引きたり山あり者の月を眺るけ
を庸を乗の書物をおのへたる詩の然哥のさの句のとむりかりいひ作て上手の
翁句の都广なりて一字も書今の姿いえたかくそも人の世のこ立ル
拙の印象をえあつあてよるの他を論をさる人

春波曰他院奇言院説をも夫より発句を言る乱に西垂の存ぶ并也侍
あるへの句に　醫師　辞　曲中情のあるこころへ　といふ句を見せら
ばて翁の凡俗を今の手やと途て尋ねるかいたるみのそく中秋ハ

句のあるこころひとつの趣より異一のふかたに存ぶ句方の流せ
やさハ　数ゝ　や此碑てかるを情を移とらそ中さあと十二ハ一題あり
しら伯者りや伯ゝや知世句中情にゝやといふ趣向まて句作ハ句
隠逸のそらき也

五十論曰おもく乱句の実情ハ彼ふ蕉実の実を乱ハ古ふ九鼎の君と
なりて百世を句を言下をたもつ句ハ千変万変の匠となる
りて拙を虚実の虚をあつふたるに句を作る人ハ発句も陪句も上
手なりと拙ハ芭蕉の実有心の虚に君臣自我の位ありて故ふ天
命の次第と云なる乱ふも句理を志て彼ふ拙に七十二支の支能ハかゝ者乱と
我於辞命則必能とよく実情と自信まのたのひハ乱よく文理を志ふ
発句ハ一生に一句もかし知りて知ふ人ハ師をう乱ゝ知らせさる乱我を知て
芭蕉を方法の理ハ知乱も五十字の信なき乱ふとて諸ふ乱らの乱
制より実情とるつまの詩文を無せも

声かれて猿の歯白し峯の月　其角

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の棚　翁

されは其角か猿の歯ハ例の詩を尋ね訣をさらして枯々と云字に断腸の
情をほのめかし峯の月に寂寞の姿を写す何やらかやらあつめぬれハ人を驚す発
句となれり翁の塩鯛ハ塩鯛のうへにて俳諧なる人も女も童も
いふ所なれと是そ十知の上にても及ひかたくて下の五文字也夏ハ新古と
旅人との見るへ所也寂寞ハ知るへしけれとも売れ残る所の千里なきを信らへし今にふ
其角も此事をたとへ塩鯛の歯ぐきに寒さを見る所ハ魚の棚ハ引るて塩鯛
のさひに木をの香をとよせ桜花の風情をむすひて南京繁昌の娘人を見
るへし然翁ハ是を見るに神々の荒の句をしていかにも見ん二句の作
魚の棚のさひしさ然いへり誠に其頃の作者達の手にかれた金玉をならへ
中より是も見へき魚の棚をとらへて其妙を前のさひて寒をしめるは優
游自在の老人にして一風の建立の高祖ならさらんや

春波日暮子か発句ハ詩哥の風情何てとて猿啼嶺上
月といふこそや楽府の句なるへし翁ハ奥柳に俳諧の風姿を発せるゆへ

十論註ニ曰爰に古今の作文を評せハ

五器[始]内に降[中]たる雪や清めし飯

古池[始]や蛙[終]飛こむ　水の音

一されハ此頃ハ数多なから昔の俳諧にも三を伝へたる此外に人の学へき情なし
姿なくいふの魂をうち込めむ今の俳諧の言ひを結して中にさひしき情を
ふくめるやうにそ詩歌の余情とも文章の優美ともいへる也らし
十論ニ五姿情論の段ニ風言（隠て情せ 虚なり）雅語（顕て姿せ 実なり）とあり大事也
春波日雅語にして風あり（姿中の情なり）風言にて雅語あり（情中の姿なり）可秘々
ここに大事たとへハ

十六夜や海老煮るほとの宵の闇

といへる発句まていはて十六夜やといへるは雅語なり海老煮るほとハ風言也

十六夜やと云ふる姿中の情也海辺夏ゝと云ふ情中の姿也

頼政の哥の意ゝ多ゝ哀ゝ雅也適ゝ俗也ゝ哀らを意の雅俗と云

十論為弁に余所ゝ俗の処の詞 肥てあるゝ〜ゝ俗語 痩て涼し〜ゝ雅言

助字要序云助字ゝ初急後而可知物の差別ゝ云ふ所ゝ言語ゝ音韻の云

ふる名後ゝ音の扱ゝて雅俗ゝ韻のひくゝ云ふ〜ゝ云ふ名也花ゝ云

ふ後也皆音のあ行ゝ云ふ雅俗の歌のひくゝゝ云ふ〜ゝ俗也なんぞや

雅也

於岩弁抄曰人ゝ梅ゝ花ゝ咲きぬやと云ふ哥ゝ山人ゝ花ゝ咲きぬやと云ふ

いとゝ云ふ所ゝ云ふ〜ゝ云ふ〜ゝ俗也ゝ云ふ〜ゝ雅也ゝ俗言也ゝ

歌ゝ人ゝ俗ゝ雅ゝ云ふ〜ゝ云ふ名の雅言ゝ云ふ〜ゝ山の姿ゝ変ゝ云ふ

春霞曰ゝ云ふ〜ゝ云ふ詞の中ゝ姿ゝ云ふ事ゝ云ふ〜ゝ云ふ〜ゝ梅ゝ香

よのつと白ゝ云ふ〜ゝ云ふ〜ゝ詞の中ゝ柳ゝ云ふ人ゝ姿ゝ云ふ〜ゝ

加様ゝ云ふ句ゝ姿ゝ云ふ事ゝ云ふ〜ゝ場ゝ取ゝ云ふ〜ゝ

十論為弁 西行ゝ風体上ゝ云ふ詞ゝ明らかゝ物ゝ俗情ゝ云ふ所ゝ哥ゝ

哥ゝ風ゝ云ふ〜ゝ西行ゝ作ゝ云ふ〜ゝ云ふ〜ゝ

行家ゝ知ゝ如ゝ我ゝ世ゝ知ゝ

一社ゝ美ゝ態ゝ云ふ師ゝ云ふて春ゝ孔明ゝ浪花ゝ云ふ〜ゝ

浪花ゝ云ふ〜ゝ孔明ゝ海ゝ以ゝ云ふ〜ゝ野航ゝ俗受ゝ猶侵ゝ柳漫ゝ

不休ゝ云ふ〜ゝ風体ゝ精神ゝ云ふ〜ゝ詞ゝ句ゝ云ふ当て詰ゝ警ゝ人ゝ

第働ゝ陣外ゝ意態ゝ云ふ〜ゝ減ゝ云ふ〜ゝ哥ゝ詞ゝ優ゝ云ふ

例ゝ云ふ〜ゝ云ふ〜ゝ机ゝ虚ゝ云ふ〜ゝ減ゝ二元ゝ虚実ゝ自立ゝ例ゝ云ふ〜ゝ

優ゝ俗ゝ云ふて意ゝ云ふ〜ゝ風体ゝ云ふ〜ゝ

一三條法 白馬原道訓ゝ論談ゝ和部ゝ細注して三條ゝ法ゝ云ふ

其訓ゝ異文ゝ弟一ゝ世ゝ人ゝ和ゝ俗ゝ俗ゝ和ゝ云ふ〜ゝ弟ゝ云ふ〜ゝ

第異ゝ云ふ〜ゝ其ゝ云ふ〜ゝ異文ゝ読ゝ

其次弟ゝ云ふ〜ゝ史記ゝ談笑ゝ家ゝ云ふ談ゝ用不用ゝ云ふ〜ゝ

其深きさびしみとい風雅の隠者のまゝ孤独ハたとへ猛将勇士の家にも
第人のさゝやきをきくごとき丹馬の位を私ら事なと世ちのうたに物のうとさへ
しことゝとちらも雅信のさゝひありて人の心の書つのうさら物てをり返ハ信
家の法也あさ田の水鏡のたゝ水にて法を雅心のさゝひやさゝをきゝ水て
笑ふ人も乱と乱を巧言人色とゝひて文ふと力味とゝひ武ふ力を
鳥呼とゝふ

春波曰三條の法ハ人和ハ天理ノ大道なり天の時也地の陰也人の和ナリ時陰
和ハ一脉なり故のこハ虚也さみこハ実也此二ツを凡天の道ふ慣ふ也

一没滋味　一碗茶

冷けや頃ナもあいちの帆ゝけ時名出ち松の木ふ
ゝ大中の理をさたきて前ゆの舞に中ある仏者と
ふつし　春波曰是虚を実ふてちつあり実又虚ふあるとく事如此
信を欲ゝ内ふあり儒ハ人ゝ外ふあるハ

一佛心施賊施老云送賊送儒ふも大裁乎死也死生非今之急後自
知也トハ儒ハ今日世法をとゝのへて
一俳諧ハ虚実の実を和ふをいて有用を為ふ也但ハ虚実の虚ふ在
て世法の名用を為のこふもや
俳諧の常談ふ無分別の農家ハ人分別ふ敵ふ有心脉の言ハ細の客の意也
一是非ふハ人を知ふ人く親疎ふハ我を忘ふ人
風ハ虚也雅ハ実也さ孔ハ其徳の理ふ動き其姿の変に新ふ人ふて
雅実ふとゝ孔ハ名利ふとゝ恩愛ふとゝ物ふて風虚ふ在へハ詩哥
ふとゝ俳諧ふとゝ

実ふとゝ
実ふとゝ理所ふとゝ虚ふあるとゝに在へハ放物ふ
月の月知の新のきゝ
芋穀の服芋ふ芋ふ秋の風
芋の無ふと芋の芋ふ芋の無ハ客の月知のうゝ芋ふ秋風の姿也

一句の姿あり二句の姿詠歌の姿に第一句の詞面の姿を出せり
一句の姿とふは芋の葉の露もて二句の姿とふは跡今の形容なり
一古今一情一景鏡の連俳編に七情の評論あり情とは人間の情なり
動けば善悪なり怒哀なり喜楽なり夫は仏を道ずと云夫は背くを理解云
其情は天地にみちくて色獣も鳥虫もかなら形と姿は十界の姿分ありて
其情の正へて言葉を言ふこの〳〵姿を先とふもむべなりと我も元は情は
言ふる一〳〵姿を知しる〳〵と宣ふ我家の舞歌を学るに似て畢竟は
連俳の意地を分けたる也千句を別要するに連俳の家風なるべき
月花の表裏なり元の姿を殊数を見親名をらし俳諧は其虚を
先とする所は情は内おかしして姿は面をとつて愛名をもらせ之の風
は情はかなら姿と姿は別なる明なり
一新古変　新古論は姿情の先後なり　他門の奇言情詩を笑へり初学の
新古の論文あり

行秋の道〳〵　数に行葉の形　七由

とふ句句あり むら〳〵なる行秋行末は詩哥連歌の古き詞にて此句も
当変資材をいる今は行の字に姿のあたらしきを所にて二句目
作は後姿なる見世なる世なり姿情の二をとるへて俳諧の連哥とは事
なるべし此一二言の情物なる風流二耳の字文をいるべし
一空一点一点なる象物の姿とは言詩の姿とは二品あり一句の姿は勿
論なれて変は二句の姿をもるべし
象物の姿とふは
行燈の火はを吹きへ蛍もけて
音数は琴を弾ずるかなる　愚
眠を風とせと寄る物を貸す
言詩の姿とふは

（中略）もろふハ知の字を為て
市の使 ことと七日 七夕
なること考ふるハ祝の字も知る
（且那めくの法師を云 俗
一出ぞるハ年も十八九二三里（とて為る七日市場出ぞるハ年も十二三四五
十里を為る故形容の年季をいへかし言語形容物の様といふ
ひあり縁て俳諧の為も言葉の理ハ後すて言葉の事を為る也 ナル
上師を文章の事ハ荘子を尺たくして物の形容ハ鹿丁牛を
の形容ハ三筋の論まろへとて
タルハ揚屋の女郎詞也
締まる 勝のさんこと
警句を為と謂ふ句仕ハ後の書を為て云成知へし
一切一切といて所を除ぬとハ一理を以て例の所を成先ろてを除ぬ

事を後まろへき也
（角髪の小ふくひ 庭 ちら
咲をに獅子のさらを理なるし
隨類得解機鍵の所
（十村上 古き 言葉の名を持て
（おろり 大の歩ぬ 雨の夕ル
（今を やる 軍 羽織を 為ル
（年行の 詠 上 詠 の 裁 を の
（ちるを へらる 陵 の 裁 を
内證のことも 使る 尺 せ ら 楽 使者ハ 詠句 尺 せ ら ハ 句仕也
句仕といふを二句の繋まて文法ハ顔詞といふ 匹 俳 ま 除 を 以 又 文 章 ハ いつる
とふ也 詠 と ふ 事 と ふ 我 ぞ る の 体 と ハ 一 句 の 尾 鬱 も いて 次 の 句 の 主 体
也 詠 句 ハ 前 句 の 吟 を 形 成 て 前 句 の 外 の 楽 尺 る へ し 句 仕 ハ 前 句 の 用

を尋ねて句の内容情を考へ如し類句と句作とかくのごとし前句の事をふまへいさゝか一毎千里の意あれハ是則ち芭蕉翁也

芭蕉翁ハ俳諧の大師匠なれハ其句作ハ時代ハ古日の時代なれハ其ハ人の接拶にて俗句ハ俗語ハ古日の昔の俳諧も芭蕉翁にて俗理加ふ今の俳諧ハ芭蕉翁にて俗理ハ

りなる也変ハ奥度の理なるを知らんと欲する故句作に先後ありて物ハ体用の分ちあり一ハ俗類句類句を二枚に活ゝし其内の其れハ諧人あり

梅桃　世ハ俗諧を思ふ人ハ今ハ俗の微細なるを聞きて其男ハ安ハと心を入て梅桃ハ其れを物語句の所遠うして桃ハ其越人なると見ゆ人ハ其れを我のごとく思ひて人ハ会点の行ぬ所なり

胸に我理なく前句此姿の眼前に信ずして主男もこの女も人物のまゝあ

る故歌の格格と見る也ものハ陪会の類句とふ前句の中ハ

ハ句作ハ前の用をハ考へて百顔ハ百句なるも一字然も外ハ飛る事なし

ハ変化論ハ多分別の三字ハ強ハり

一句の位を主とせて前句の姿情ハ位を守る故胸に我理なき也発

句又如斯

眼前の姿

被ハ袖を入て さゝやく

きりハ大花ちりハ長ちらん

さゝやくとハ読使なり

振袖ハ水を流きて

世をさらさるゝ 西 和尚 僕

類句ハ前句の中ハ俗りて句作ハ前句の事をふまへ其ものゝ前句を除

ゝて位を考ふる事あり其れ如し除き位を見ハ如し除き方法を考へ

順徳院の御製れ

ちくあの川春秋水を修まる樂
きゝて味る の聲の高ら聖
水青し 皆く 冥の 夫の聖
澄ハ情ゝ 高ゝ 志ゝを 洗ふ

心發

○ 俳諧と諷諫の道ある事

一諷諫の事家語孔子曰忠臣諫君有五義一曰譎諫二曰諷諫三曰陪諫四曰直諫五曰諷諫諫ハ五つあり孔子我ハ諷諫に順ふとの給ふ諷諫ハ心の虛實の理をよく明らかにして言葉の和を以て向へハ其人の實をくみ其人の虛を謝ふ

一楚の子西君を十里に侍奉して諷諫と其荊臺の遊樂とをもつて家語并改葬十四に出多り愛に滑稽の人ハ虛を飾て道理を行ひ和のおもむきを言ひ出さゝる其人を順ならしめて其時宜の用となる所ハ天下の宝なるなり

一子貢日ク呉王を直諫して其面非を強ひ呉又亡ひぬ是ハ実に実を行ひて虛なきが故に一身の忠のみ多くして君に国に利あらざる也又亡ひぬ

一俳諧の道ハ孔子の曰我從て諷諫ト云諫の中に撰ひ捨ヒ愛に人実を以て求むるハ我心の虛に利を以て向ヒ人虛を以て求むハ我実を以て固む

実をおひしと云虚をおつると云句作に拙くて堅しくてあるを虚実也
詩は文質也哥は花実也
一滑稽の人ハ情の虚より言葉の虚をもつて人を正道の実に導くべき是
俳諧の信也
一滑稽の人ハ五七の句に作るに限らず平生俳諧あり五倫の交今日の其行
皆俳諧にて虚実諷諫にハあらねと云事なし常に人に對てハ似其
詩あり其言語をきくに似せ合ひさらてハならぬ邪正の色見ゆるぬ也其無心に
虚に居る事を知べし
一釈尊虚なりとも四十余年未顕真実の実有孔子実なりとも戯言の
虚あり虚に居て実におこなふ也実に居て天より花を出せり達
广を出せり実を人に示し虚を諷ふ虚を凝らしめて実を疑はし
知る俳連歌の差別は佛儒に違ひあるべし
一達广経を破るとも二相に捗り伽経を作る破り破らざる処を思ふべし

一礼節を以て詞と信とハ虚也物のしたなり
一後鳥羽院宗祇像の中に何れを師とせんと問ふに宗祇御國体の御
照らさせ師とすべしと又の給ふ遍照を誰とか申すと古今の序にいへり
如何宗祇御日誠出きまでこれを哥仙の流と勅定あり是虚なり風也

古池や蛙飛込水の音

惣じて發句を案ずるに蛙の聲をとりてハ心に其訣の一世界を観じ對する
さひしさを胸中に蛙を我る我の蛙とよく其氣形に変じて案ずべし飛込
むといふ作より案ずるハ作より深情をそ出る事なく動なり蛙を聲なり実心也
蛙に對て夕に宵に魂を作を深めて我を案ずる事を忘で蛙の
鳴声ハ古池と趣向を定め聲ハ蛙古池ハ趣向聲の蛙も魂趣向の古池ハ魄
也魂を居中より魄ハ動く蛙古池とれ對して其句より作を出せべし飛込む
とハ聲の蛙より出る作なり水の音ハ古池より出る作也二物に趣向聲より
作の出る處にて中和の事也蛙の飛込ハ深めさる也水の音ハ耳に聞て観

まる情なり夫を其句の情といひ姿といふ形なり

一例のさひしき例のあるこゝに翁の老僧まして梅花御の文書も多ありさい

しきも切きれ句の体也おのれまた虚まてさるきに実也虚也花也和也

あるこゝ也実に実せさひしみや

一心術なりて虚実といひ実詩なりてはさひしみ和すこゝと云

一詩なりて花を文質といひ哥なりて花実と云和歌なりて景を虚実と云

一文道を貴く異とふ其文に詩哥連俳なり

一俳諧に虚の文より道の実をなす　芭蕉

一俳諧と風諫との別ある事に形の実より物を捨て其人に和らぎ白

ふとの心俳諧なりなの虚より其人の実を和らぎ人さくとの心諫也

あるこゝ

（翁やの俳諧は実なる　梅の花

花ものさくとの心歌の心歌へる

さひしこゝ　古池や蛙飛こむ水のおと

（このふるへ枯て俳諧実なり歌

後鳥羽の院の御哥なり　兎士

きひしこゝ

（連のあるこゝに通らす先の月

　　

あるこゝ　神路の水うり山や夕ぎり

一恋前情後に今の和え也情前姿後に連哥の出こゝ方にて十句一

句もあるこゝ

さひしこゝ　世を捨て後古き人幽居にて

いろくの事あるこゝ

　　秋くの　此句情前姿後也

あるこゝ　梅の香にのつと日の出る山路�the

　　此句姿前情後也

六義解

一風　本文尺言ト訓スヘシ和歌ニハ歌ト訓ス風ハ六義の本躰六義の長也五義共

こ風をそへさ凡ハ文まなりた詩の国風と遠へり風ハ文道の発頭也夫文道ハ邪正善悪を分り貫通の器也夫婦の情と知り武士を和け鬼神を感せしむるを風の深く隠れて言外の外に感アルより事物を動して鬼神も應ずる也天地の風なり情を二事第物とハ人と鬼風也文道も風なるを昨さ風ハ文なりなる七情を情の体なるハ風なるを其情を発して其情を知らしむるを風なるなり

定家卿曰風ハ聞く隠れ中異物を対して形を発するもの也竹木を動せハ音響なし昔の俳諧と云ハ言表なるの物のことあり情を知ることを初学也中なる情と言葉との風と知りて俳文の体を立つ故に俳諧の元祖なり

一雅ハ正也風ハ直一也雅の端的なるを風なる物也知るを夫を和けて与を風と云風ハ温和雅ハ厳し風直なれと雅なる風ハ正なり此故に剛雅也柔風也相交り風雅立りて文を為し正道を調る風雅ハ正直をもて本とし雅ハ懲善風ハ勧善と云正ハ心の躰の正きを直ハ情の用の直なるを云也世中なる出る神道の中枢なる儒の中儒也仏の中道也

雅の句作ハ物を詠じて外に物を例ふへからた深き見なり

木枯の一日吹て飛りけり

の類をそ大直なる法と云

一頌ハ祝歌なりて奉献家移祝言葉何れも祝なる事を用る也頌ハ文章の車となる處也仏神なり君父の徳を讃して一切物を祝なるの情なり

頌ハ賞美讃嘆也第の句なる深きのさ一国なる命なる俳句形（右風雅頌ハ情也 左賦比興ハ言葉）

一賦ハ文章の作者也凡て料の趣向ハ用なり一句なる趣向二つも三つも引物連類也賦ハ文の要となる處也物をき並へなるなり

一比ハ并なり譬へ哥なり準え歌也物を元て其深なる準ふとのなる準へへを事を知らしむ物なる譬へて此斯と云なり如し

一興ハ物を物なる譬て山なる高しと虎なる強と云如し比を物なるを比へて此斯と云ふ興ハたとへとなりて得なるハ先を起なるなり句作なる事也興ハ二つあり一ハ右の興也又題興の興なりて思自の体なるの体なるひとつあり

凡六義ハ人なる五臓なりて五行の気なる変化なり故なる要之也

六種ニハ(ヨリ)ガタシトシテ六義兼ネ備リ全テ文章ヲナス然ルトモ風ノ多キヲ風トシ興ノ多キハ興ノ句トス何ガ多キヲ以テ躰トセリ平生言語ニ云フ所ノ六義ノ外ニ出テ本ハ人ニ言フニ風ヲ以テ(人ノ詞)本ハ物ノ言ヲ以テ判断シ頃ル潰シテ比ヲ多クヘ或ハ興ヲカスニ述ベ興ニ美刑シ其言ハ其事ヲ調フルノ類六義ヲモル事ヲシ

○切ニ三段ノ美別ある事

苦の終句連哥の三段切

花も色も嵐やとなん夏の夜

ハ二字切

折ふしも花ヲ限ん風も哀し

ハ二字切

君次ニケ夕き初見せん宣なケ

ハ三字切

ヲ惜ムよ屋敷新きぬ九むん

二字切

蛍よ伊勢かも家ノ花ヲ思ハ

本歌古今集

飛ヲ引ふちもあるあ所ノ世ガ人ノ行物ノ高ヒ

三字切

梅花佛

伊勢力

ハんヲやくや本信ヲ人ハ

一歩ヨリ出ル

三十三法中ニあり 異

一大四

辛崎の松も花ヲ待ツ行春ヲ近江の人と湖ノ水

下五文字ヲ上五文字の上ヲ受テ悟言葉ヲ連綴ル物也恨モ連環の如く綴ル絶

一押字

何の木の花とも知らぬ匂ひかな

とヒの字ガ付ケテ上ヲ受ケヘテ下ヲ起ス疑の初葉上ヲ何ヲ下ヲ取等

の活字の用ヒ方ヘシ一句ヲ名綴と言事あり何の木の匂ハ即名也 夕影や秋ヲ

名くの鶴無二句の綴也句作の綴名と云事あり何の木とハ名也花とも知ラズ綴

也句ふる郷とハ綴也名綴の事ハ和歌ヲ云ヒ

月ヲ見ル人ヲ待ツ恋ヲ(名)ル嘉ヲ(綴)ひとつの秋ハ(名)あらぬ(綴)

一推字

夕影や秋ヲいろくの妙くへ

推字とハ詞葉の三多ヲ少色や秋ハの色ヲ上の疑ヲ推テ絶ヘキ

花の夕影ハ名くの鶴ヲ花ヲ夕影ヲ名ヲ鶴ヲ絶ヲ句ハ字の八字ヲ合モ也

一句綴切

古小屋ハ小野の中山ヲ山ヲ

七文字なれども九文字なれども十字なれば仮に一下五文字の中と連出る此部も下五文字なり
詠り出しても添めても二字なれども三字なれば仮に面白

一無名切　四方より花吹入きて焼の海
咲かとも桜の中より初さくら
名月の花ちとなれども
一家ちなる枝も無名の童歌
無名切の詠出句体切の下なれども言葉の切なれども
あらぬ四の切なれば無名の詠といふ也一家ちなる句の事無名や
と切を続くべきを無名やと、体切の古人親族の中にて魂祭に参れり
この心ちなる句は業者の句也

地蔵引　地蔵引さくなれば
引さくなる切なれば
むの風流也風流句節なれば

一四切　炊へて餅さへくちてくちての花
なるなれば花へなれば紅の花
花の名のなれば知れて罪作

此詠句情言葉明白なれども此故に心印とふされども
有形なれども似たれども似たれども似たれば三月七月とふを心の印とす

○四折　曲地の事
一初折　表句は地を先なれども奇言讃歌を所に高句も先なれども
なるへし初表は月花の儀式多く礼節を調ふるを俳諧の地と知るなり
一二の折　半地半芸の体裁の場なれば初折儀式の心を解ると知る也
一三の折　表を俳諧の体なれば例の曲推を定へし名表は狂曲節なれば名残裏
百韻の芸尾なれば其の其折の匠達をそなへて尤地の句なれば我句のうち
人を居せたるなると一座の板と云て時所もなる知るへきなり
一順なる句は花の位者は定匠式は貴人防客を定れば位さあやうし句は速

ゐ附へきも也さとひ妙句に一座を附せんより疎句は其座の主尾を調ふへし
一曲節とハ曲を作るあり節ハ言葉のかゝりあり　拍節は一節ゆ節ゆ
一前句ゆゑ　類句を定とハ假令ハ

雪こそハ冬ゆ　神をそらハ春し
花のふくきの白雲の山越え
何をそ見ん月を西へ行て
花と見ふ方を西へ行て

前句雪ゆゑ冬ゆ　花の類也前句を定て花とハ類句也をとるとハ
雪ゆの主使ゆ　花見てとハ前句ハ春ゆ　知るへし
一附句は執中の法の事　西行を中とす　宗ハ西行也　連歌ハ
の実ゆ書たゝめ初相壺鉢ゆ　大鏡花の書写も
中より書たゝめ最後とかく法也用事の書札ハ安否書写の急用を定調
て事用を中ゆ書ゆ如し

○花ゆ樹の事

花ハ樹ゆ出て春ゆ咲ゆ
ゆの蔓ゆ出て春ゆ花ゆ
ゆ二句ゆ樹の句を附る前句也　樹類　桜餅　花ゆ咲る桜別の名也　初形の
花ゆ桜ゆ咲る拍也　初形の主句を句とし花ハ名称の主句をゆ主事
を為ゆ言ハして祝言ゆ　遅善ゆの事を句ゆ　春ゆ句ゆ花とゆ
句とゆ花を寄ゆ　ゆ焼くゆ　ゆ焼くゆ
発句　ゆこしの芳野ハ岩ゆ知ゆ
如折花の庭　我国の吉山さゆ咲ゆ
発句ゆ野花の心をゆ　又祝類の花を理解せる発句ゆ故我
のさゆゆを相対して樹を花の庭ゆ作る也　此一句の格を以て歌作あゆ
花ゆさゆゆを也ゆ

○月ゆと星の事

一発句脇の星月夜とあらば第三にて季枝を受へし表七句目に
他季異名の月を受へし
六月や峯に雲おくあらし山
什発句にて初折の表の月は異名の月を受へし句六月と詠ずべ
きと吟ずは暑の深きを也
一組菊月の座に隠見の句あると云事
青嵐をあらぬる神の宮迄
吹く萩の風をよきさしの
八月を旅初もちきし山橋神
前に青嵐を月と変し発句は変の三句目に八月次の月を用て以月の
字を出せるのみ也
こさみ乱とあらば月の句嫌なき月雨とあらば月を嫌ふ
一強き師走に月隠てくるしからんとお越を嫌ふ也音訓の差別をとて句さだ
るべし月次の月にて夫れの月をうる事
○規式の席に峯句の事
一裏一順と執筆の断るべき人へ句の花をとふへし
一句に花に雑用あり発句を賦として句に花を用とも
発句　七浦や一字は艶に一字たい
峯句　西方の制を引るる　八景
我門の武と出る名所雑の句も仙をのろ笠に蒲雪の服を着て
四季の花とも云へきや其身の服は冠る笠ぬ峯句も此の心得あら
ちとて嵐の一字をとて七浦の句に乱とも云されは定家は一字の題に嵐
雪の発句を乱はずとも
一峯句は掛をの抽の如く七字くとも云へし
一峯句は執筆の云る母は名字を書て名字の肩に執筆と書也
一順の終に執筆の句あれは峯句を他の人なる事

○ 當面する物の名の事

一花の芽萌る白露の金釵の事　本面白ける枠の空の事

一矛ニ　雪のうらも露も鈴もまろびしも

○ 一金釵は雜色事多く其人其情もありその人々うらは衣類等をとあ
るふ類也附句は有心附名の二つ也雜名の二つ也百韻は金釵七ハナ十り

一逃句　金釵の別名也

一起情　有心附の別名也前は其心なれば附句の情より其情を起して
本は前句景斗なるを其句を起して人倫の句も出る

村雨晴れて夕日きらはく
うるしくも田中の松のあらうち
見ハ狐も化されて　あらう

起情より化されぬ前句の松のあらうちを人のあらうちと起す情也

一向附又有心附の別名也是は自他の色別を形て物をなふ

大名を物と　落葉好きの松
老僧を麦金のお集られこのり
大名を僧をとてむるふかくの如し

附金　七名八体の事

一有心附とは前句の心言葉を見聞附こして附を云
重持竹二人筆は一本
焼餅の如きり巴ニうり巴
朝鳥にあんさ　年芽
年慶は巴ニ付ふ如きり三ウ月なんさの柏也只梁を見れ明ら要なり

一色立　青葉の前句ふ自小と附るる如し

一對付　前句を潔ニ小は故ニ負外と者
高の功者ふ家を持ニ
親の位牌も幸の見聞

見せと云ふものを寺の見せものとして前句の高に対せり

○

一八體

其人とハ前句の貴賤男女を能く見定む

其場とハ都か田舎か橋か山か家か庭か

時節　春夏秋冬の時節をさのべた

時分　時刻を能く見定め多く逃句と見

時宜　人事の刻時の宜敷ハ太平を脱れ乱世を怨み喜怨の変なるを刻まるる

観相　飛花落葉を観し人変世の様を観る類一座七八句まるた

仏　古へ有ける事を見るか如く附出せ也

天相　前句を見定め日和降物等の類を以て附る

空境　對句の如く前句浮まれハ附られぬ歩也

障ある類の外日さらたく

○

智愚ハとかく人そと　花の目を拭ひ

初発を花人の見る深日新を云ふる人の新切とた

八体ハ然也七名ハ用也八体ハ玉ハ其場のて時分あり玉ハ観相うて其人

あり斯ク廣むれハ八六十四然と成れさるとも其重なるものをハ其名とた

○

一八體逃句

其人　松風拂ふ童の外　垣

其場　抽んでる人ハ新者ハ居れ世て

時分　山陰も花も日枝もうつろて

時宜　鶯のまく庭たらぬ紅梅のく

時節　天平の世ふるる寄篠て

観相　水うれて千年もうとき比なれや

天相　とまらぬ浮世の海ハ烟まて

なりなるるそ絶て世のきれ

仲　時雨も栗飯のかさしく色て

○一七名詠句

なほもなほうやうなる　下り船

有心　我ら建くる　仏　禮拝もむく

金釈　形をもへてなるる　和さひ

述句　輝の世間山　祈もるこの嶺

右三法

向附　机の上をもてらす　蘭　二

柏子　春へらんとて　梅のさふく

色立　青い山風ふき　麦ひとり　青

起情　うきかく　樹をもてる　梅

異外起情　甲の和　睦　阪中岩てある

風　蜂の巣北　針もおそ　ぬきこく　泡

雅　(蜂)ていく　まく　こそ　さく　ぬ

須　花の花も　いろは　山　牡丹

賦　滝の　花の　流　中　茶　掘

比　蕾の　や　和　我ふ　服　物　捌く

奥　雪をの　き　蓑　を　挿へと　月　面

京人をいさむや　蓑　山　唱　鶯

水　うつ　も　船　も　野　ひ　り

二字切　種　苗　あ　ら　も　あ　や　乱　蔭　の　塔

三字切　種つきよ　花　を　傾　く　そ　言　あ　め

二段切　鄭　桶　も　清　夏　も　桂　生　夜　の　月

三段切　今年年　笠　も　さ　う　り　か　き　つ　そ　こ

四五段　蕾　も　蕾　こ　う　樺　の　そ　つ　言　鮎

赤顔

横笛
轉轉
双関
影異
互見

月もやく暁ちかのき 踊の那
時雨る月は山端の御田刈
枕草や人も秋の風中
初鹿の声も桂の高き
篭人も春の庵をもとめ 杜宇
枝折戸に夜行僧の問ふ
ひとり橋おもてのさびし 荒の野
立田山梅むめ多き 初もみち
蕭や秋の夜 但花の
後の立ちも 夕の鶯の
新宅のうち 物ふて若草
何風の吹とも えへ雪さえ
灌仏は花の 降を純蓮

即興作
墨画賛 彩色 墨絵

太陽のうち彼岸まれり春と暁
鶏のひとも 鶏のやは芽萌 畑
うしろ向く 僧はうち柳
三井寺の三五 却るを遠 春
岩陰しの 岩間のうぐひす
杉風 うふ望の 休 垣
老僧は 源子の 家に 筆
老僧は 衣の 紫の 伊達を
老僧は 腰ゆて 皆 を

○
誹諧の道と 事

武人問曰 俳諧は何の 事 曰 佛 法 話 白 人 事 又
問 俳諧の道と 事 又 佛道 達 広 仏道 ▲ 如 新

○ありて後の実力を認 俳諧 俳諧。

とゝろ迄ゝ事ハ通ずと云ふ道理なり 文章を俳諧の理を蓮等
の理を立て世を向上の一路に導ん

寿秋氏法華難解の秘訣

○俳諧の事

俳諧の字ハ古来より字義なれ共ハ字書引て俳ハ非の意なりとも
或ハ史記の滑稽を引て俳の字ハ空虚の理あきらかなり 孫北海
古今集等の俳の字を用ひ来りしハ戯れ事なれ共実として情を其通りに用
ひ事も有る也 尤八雲御抄にも俳諧と連歌と二様なれ共我家ハ
俳諧を古人なりと書給へる歟 名を別にさせむ(花と
言語に拘ずと云ふ理なり) 我家ハ今より俳諧の二字を称する
他門に対して穿さく見へるなり

○虚実と事

事物を虚なれ共実に働く実を虚に働く(こゝろ)と云ハゝ
立て人情うらもてなを假令ハ花の美を知て月の傾を賞むハ連歌の

ゝ也 ゝゝ 扨ハ俳諧の実なり 柳俳奇 連俳と云ふ事ハ上ゝ
ゝ 俳諧ゝ虚実を文章と云ひ実を虚なると世話弁と云ひ
実を実なるを仁義礼智と云ひ虚を虚なるを芸術と云ふ
俗く見て俳諧を人をさして我家の俳諧の人とゝ

○変化と事

文章と云ハ変化の也 変化ハ虚実の自在なる也 黒白善悪ハ実体の
あやまりて思きを思ひとゝ云ふ思ひきを思ひと云ふ 言語の変化なり
本より思白一人なれ共ハ天地の変化を格ふ人の変化せざる人ハ
思ふ所なる知情なり況や俳諧ハ己ゝ乱ハ有ることゝ也 四海を分め
今其夏秋冬の変化を俳諧と月花の風情ハ有頃
有日を変化生人さるを所り其変化を知りても変化を事と云ふ
眼おのゝ為ゝ迷ひ前度の変化を見ざるゝ故也 ゝ化と云ふ
新古なるきハ人者の変化なるの新古なるきを見て

一定の変化を極めしへし変化大概料理のむまく淡く硬くなるもの
の如し能くよくの為あきらかあるべきなり時よりまた変化を知る
事

○起居轉合の事

俳諧は上下の人々を問へし起居上座空界を白て各人各様の
中より起居を発句とす一相起るなり詩を又は言を能とするも也
姿の一相を言葉の言葉の言葉は情を上の一相をうけ相をうけ也
氣は發句は陽也服を陰也沖三を一樽て天地より人を生ずる
とし人々を地より働あるを知る一人を地より働あるを知る一人を也
新知一人を也発句を席の客の位なる一一を変化して山を川を
一定のあり様といふべし

篇序題曲流

○発句の切字の事

発句の切字をふいを別の心也地いを水中にあるて言葉と
を好るやうとへいを言と言葉の名前也又問答のとし故の切字の
発句をも心のを水あるは発句のあらて
服を詩字ある事
服を言葉と顔字をて面まとをふいを初句の敬也言葉の
あるをえん事あるべし

名くの名をの弱くし書の字
うをかをくし帳の変は言葉の
句ををめて俳諧の言葉を撰する人の俳諧の名目弱くしとをひくる
言葉を言葉の一樽を興をて帳の変を言葉をとは発句をの和歌をく
服の弱をれ顔字をの名俳の論儀をとかくの服は発句の金服を
名の和ををををすへし服の名ををは服の句をあるを
発句は発の伝をて服を言葉をの働きをは服を色句をををて発
句ををひ弱しをを木山川の一定二定風俗をかをて定の人情を
はくへき也 はは樽の一定をて 発句を定をををを

○ 沖三月毎四月見事

沖三月の頃より五月の末迄の間の事は一月のさはり無之事ハ
らあれすして次の月へ及ん申ハ此を知る時ハ所の家ての家も
かきらんと知るべしさて此月ハ沖三月のさはりも此月の顔の中まても撰ん
用とに沖三のさはりを知らされハ必そこの家の顔の中まても撰ん
頃りの物愛見として或ハ動さ或ハ動るとて一世の顔家
沖法あるハ知らぬ人の推量也

かふきもまと家ならぬ四月五月

何れの物も知る世沖三月の頃より一度弱り年一度て他所を巡るさて
発月と年月とのさかいハ此沖三の顔家にて立るとしされとよの法の
頃りまて事かくまき事なり

○ 四月月毎に事

四月月ハ洗前生度の月なれハ特更の大事の場所なり此と
ふるを発月服沖三にてふ留形ふる所也 今多くやり月ふる物年
いそ年なれと一生の変化ハ此月より物事へよ物一会とハ通ふる也
立人て発月より留月まてふきふる或ハ重く或ハ軽く或ハ
動ふる其月その時の変化を知るべし 中月此以下の物まて
中月以上の人とも此接の所此ふる事を忘ふされハ自己の俗ふ
くらき人と云へし

○ 月花の事

月花ハ風雅の的也月ハ月とあり花ハ四季共に見て月ハ月を
賞りなる也されハ名所の景の月を眺まて哥作の時ハ二花二月
ともをへし表の月月の月ハ秋さる事
花前の秋事 むかしく妹の聴物さの事 秋雪発月ふるハたの
りさも此きの時ハ此後迄景の人もをへし 世界又社のあれしられ見へし
初心の人ハ如何也毎月ハ七月月花ハ十月月ふる事 ひとと他人ふ

桜咲る時分也いつとなく春もすゑ成る頃和しらべて月花に風雅の座興なれば此比とて什日あり座を分りてさのみ月花の句も新造を成むべしなどとて一座の宗匠執ちまたたとえて毎もく佛の句なりとも其時の時〳〵さて斉時を好むべしとなり

○花と桜隆る事

花と云るは桜の事とおぼえたり花と桜の心の花也花と〳〵花と云は草木のお花咲草の花やうなれども我とのおく花なれば花と云るなり花と云は草の花なれども其の香に付て桜の花と云なり桜隆る方〳〵花は其の発生ものなれば隆り古き花なれば隆る事 他接なりとて初心を弁さて古い桜朝の数多と前のあらそいさるは隆〳〵花前の桜も咲るて数〳〵花ゆえ桜と称するもあるとて桜と云と我家の伝授と知るべし

○當季を賞る事

月花の句も かきうて四季の隆句と其季を賞する事前の三句隆きは当季を捨て題句より賞るべし花と〳〵柳と題句を立て門の花とあらんも月と題句を立て桜の月とあらん前のこと句を書きはいまの當季より賞して花を月の類五句の桜を書きせされば二つの賞方〳〵えより変化の為なる事を知るべし

○二季を兼る句の事

古い二季を兼るものとは後の彼岸と云秋の彼と云ひさるとは前の焼る名は後の名のもふる焼の季也 此数多を兼る古い名句の二句の花月を隆るは大き桜花を兼る前句の季の随〳〵

西風 秋季より吹 紅葉を夏に吹る歌 二季兼季 低多き故也

星月夜は秋季也 月を隆て発句は時は月を隆て其名の月あるべし みなさるは秋の少なる入 春ハも必冬季なる 十月の花おかし 青柳は新なりけの我なりて其季の也 虫鳴は秋句の心なるとも 春四季のうち春と秋とに人なり

玄外に勢なく行くべし　古哉の句は「枯野かけ廻る」の語を用ひたる也
蕉の句と云ふ外なし　されどよく知りて其一句の働きなるべし

○　発句の時は季を用ひる事

或は夜英蕉翁の踏破の中の歌、扇箱などの如き用ひる物多く
平句なる故は固定の定句と一句の主句なるべし必ず北斗元
也句なるべし　此接は芭の言葉を知りて文字の格合と空数全正べき

○　発句のかるみ極の事

発句は虚風の論と称すべし　己れ句を作りて目をふさきて絵画をそらく
見るべし　死活花の一つの形なるべし　此句を作りて仏性なるべすの事を先まして心を
後ろ見ると云也　去へて発句とても附合とても目を閉て眼前なる見る
べし　心平地ひとしくして来る心見る事の極事也　目を見て作ると心の
をもて作ると自己他己の差の如き諸集の
附合をもて工夫すべし

○　附句第一やうの事

発句は若別の事也　附句は其句を留て無住の第一ぬるよき也
我心既に如此句を既に流通知りて人も第部一度事新世界附句
は新人名の句の新心を篇一体ぬるよきなり　此句の句を
乱倒変あり　総て　工夫は平常なる事也　其句なる即て心分別
なる一定意卿もうく附句　附句は第一入らんとの事と仰られし
久しく第一入へるまよきて歩きて　歩きとて
世情の老う者修行といたるべけれ但大なる附句　元云ひ歩して
後ろ物をひかへせは心の出来る事　解若別の子なり

○　句を定むる事

附合といふ句を定むべし　其句といふ一字二字三字なるべ
うるに云を執中の法と云物厳中に執て前後をなるは一百千の数

歌ばかりにて前後なく一人歌ふ歌にて終と云る故に毛中納言
歌ばかりにて心なく一さ丸に表八句の題詠のごとくあやうきに者と云べし

初橋　塗笠　月　暮雪　曙鶯　村雨　新酒

姫路題詠句ごとく歌にて或は作者も或は哥かゝる或はやうなる
歌黒白表裏の姿絵作りたる句なれども也は作者さ丸い
人の俳諧に歌ふ事なり右二字の題詠より変化のすがたもあき
らかなる故に右作者の好嗜を知る故に作者を知る人い
我句を作りて後に其題詠を人今まての皆形
なるありて其句を作るなり如くに二字三字の題詠をかぶる事いか
はとて行むべき哥なれ一体は変化の為也と句を一以て八
俳書御作とて毛中納言は句を作と云書丸一て地蔵尊人のごとく
なるべき哥ハ毛詠句なるを知る一さ丸と二字三字の題詠もけらず

毛体ハ作の所なるもよろしあ世ろろう空撰とゝ人る歌一字見りて
其時其句にもあらさるハ文字の所理ハ書歌しかゝ一さ丸ハ音韻も
三ハ句とこ弱ハ句毛一さ丸ハ言語の道理を義て俳諧ハ俳
物所ろ一さ丸毛の二字を毛て我家の秘法と云ふ毛一人よく作者を
ユ夫せ毛ハ下の改とあきらかなる人る歌の働きをもなるべきなり

○　哥の句の事

哥の句の事ハ古或を用ひた故ハ嫁姫ハ歌ハ歌ハ歌ハ傾城の文字先月ハ
て哥とハ云ふ事書句の心ハ恋あるハ哥を俳諧一
ハ句へハ他所ハ恋を一句ハ恋を恋を風雅の花言葉
ハ毛云ふ事なるべし先ハ陰陽の理を定ること云ハ我家の
発句して他所ハ句を穿鑿ハ毛へ云て

狐狸窟仙は化物なることは昔より点れる所なれども
そのあるべきの理を撰ぶに棹みちりあて社中の好士のそなみと称せ
されば月行星うつり日くの変化神意のしるべきを八十とせのむらし
弦とつくる意義の宮ゝ麦丹畏の花をのぞりし先生菖柳
の象動をみるに新たに新たそらくは自屋むしむ今うら七条八
幡いたる也虚ゝ実ゝ実に格ゝとしても増徳の地の教相ゝ
来観弟象ゝ仏ゝ法ゝ虚として何ゝ実といえむさる微妙の親類に
ゆくゝ義を初ゝ桂人食を若水俳諧の大ゝ類のむれかゝ為ゝ社のゝ
ゝ思ゝく隣ゝ自ゝ為ゝ方代の貴も具著の流行に体ゝ
ゝ事ゝ以ゝとゝ男の書野ゝ来ゝ月あゝに業を陳ゝ
ゝ此集の名とせゝと社ゝ言葉ゝ屋の場ゝく

寶暦十三中秋下浣　春秋菴の僧院自序

○月あの梨

青柳東磨

柳の葉の眉をかくらぬ
[illegible]牛の角の眼を笑ひ
[illegible]柳の陰を涼う吹くて
[illegible]月あの門のとる
[illegible]なるの蔭の返て
[illegible]なるまての半一部
[illegible]風の煙あらら向
[illegible]の煙まての旅
[illegible]の月の輪をのて[illegible]
[illegible]ふかくら本妻
[illegible]の裏の[illegible]
[illegible]ふく[illegible]

陰のもとつねとなりけと雨の
降まさて二さとこえ遠く見る
堂も堂の屋根の朽古して
陰るかの柳くれなる芍薬の
何をこうるも文多人忘れ
こゝ飛こゝ京の都つかつて柳の這く
七代を元の主人を忘れて
風雨のうち 芭蕉の葉の 常盤
文多の陰き林の古寺
掛こゝ弘法の筆の残る
陰より雨の降ぬ
をなる苔ふてなるる四畳と
掛陰とうち紛れ雨を
大箱の芭蕉に問ふ来る
掛陰こゝ陰るうつて陰ませ
あれうさうといふうち恋
むくけの土自む後も住来
畑中の墓まも墓ぬしあり
掛こゝ変ふ変ふ軽あし
管のはこの名ふたくまて
氷の蓋ふ水の不自由
日第ふ所屋の軽を吹出て
陰れ者も陰る所後る
竹藪こゝ陰る書とりの る
聖こゝ寺こゝ陰こゝ陰る
うつもこゝ陰こゝ物摩 硬こゝ

陽炎は笠もそつて立ちぬ
うき草の交てあるれ行水
山伏の出しハ剛川茶をうり
師宣の浮の解る樽の夫
湯ちりてさらえ行殺鼠さめ
あの顔て男蝶ひら片隅より
秋も典よ恋も結ぶる出る
若月の美き人まもなされ毒
師走の黒こんぶの日もあり
鄭市小雪の子ふ地のそれ
出しのとやら眠る蕨又
中の修学 柴の地 樽茂 打て捨
醤油の香へ黄の字俳諧ちり

秋は小笛を納て高地好
松の助言の人の誉て
海の水 晴を 揚る 振神
鉦の高く七て来る事かく
鉦ふく 簸に 蓮を結て 拾る
我は 海 あ毛 れてきる
此樽は 温泉の 帯 毒 あ
いつまても女房の面影 安
ふしとの 祇 揚て 揚 ち
河豚の 松 ふる 呪く 乙 る
鉦ふとなて 武 鉦の 計 ち
竹樽は 椰 笛 笹 の月
鶯ともなく 新 人 の 母

今年の春の雨を喜びて
大きに指て神佛に感ぜ
ぬもなく
池さ出す　祝山の穴
流水の岸も田畑にて焼て拵る
憶ふ暖をさせる　秋の風
常人名佛ふ　神の鏡ひ
かくれの内も写れる　墨絵
みなの色のさく　如もなくきみ
能くきけハ　きんん川なる
野宿なる方角ふ　西の方なて
通ふ　西に日の旅ふ　西に

二階の間を金ちくえる
這入られぬ　体の雪を見ひ
軒のうつる井戸へ　捨とのの
夕立ハ出の内ふ　上り
一寸ちくふ　もとる　養生
髪を仕業へられ　冷ぬく
夕顔の実も　軒後の切剪
遠ちふ　頭ふへて　縛ふ
物の蔭も　佛ふ　上　洗
扉風の歴ふ　ものに
仲人も　物の　磨古ふ　砕つ
別　縛も　縛ふ　行ふ　苦
縛ふ　ちふ　ちり　水ふ　降

考をまをを夢ゝ夢ゝ温泉の山
ヶ葉の世ゝ階ゝ持歩彩
をと深くく書の世ゝ文
日ゝゝ夢ゝ夢ゝ夢ゝ由貴
お角と堪ゝ構の間ゝゝ
学難ゝ角ゝ新ゝ新ゝ人ゝゝ
中くの間ゝ面ゝ金歓ゝ陰
巣ゝを抱くゝちゝいゝゝ聖
往事の墨ゝは聖ゝたゝゝ
技のくゝゝ書くゝの状
沢山ゝ山不ゝゝきゝ陽ゝ化ゝ
大ゝゝゝゝゝ載ゝ巣盤
軟立をゝゝくゝゝ筆ゝゝゝ歌き

ひとり相ゝゝを髪ゝゝ出ゝ
住ゝゝゝ京の富ゝ藤ゝゝ
神ゝゝゝきゝ行ゝ対ゝて見ゝ
ちゝくゝゝ母ゝ毒ゝゝき習ひ
風ゝゝ修ゝゝて現今の仏ゝゝ
者ゝゝゝゝゝゝ毒ゝゝゝゝれ
信宝を我ゝゝて雪信ゝ
ゝゝゝゝゝて仕舞ゝ人ゝゝ
新潟ゝて井戸ゝ姉ゝ
ゝゝくゝゝ行陽の破ゝ股ゝ
ゝゝくゝゝ陽人ゝゝ歩ゝれ
新宝も城修ゝゝ独立ゝ
ゝゝの信ゝゝに出ゝゝ面ゝ

人殺しうつ亭の時う亭
履物の杉の美しきのなく西の西
何時ありとも見えぬ所ふ西髪のて
かるるやうふと海く杉の家
東西も金沢ものと仲人に
木強てふくの天ふる船あふ
宮西くとも西の宮れ生質
橋変隣を杉まとうへふ
イむうちて日新かるむく
嫌の出まれ相変も杉て宮蓋が
若月は皆下宮も起て若る
上ふまれくとうる宮文入
杉陰ハ重の写も深うく

願ひの笠ふ行金ふ
此杉を使金も力大杉引
とうて伽まふあ宮も
上ふくうくう恋ふ調ふ
この杉ふ人の宮ふ勝ふ
評判のまれ西変ハ国ふう
移るのて宮ふきの敷桶ふ来る
風ふ変て強て宮目て孔強
伽宮の次て笠まへて変
結杉ふうく使ふく女房
宮に子杉新杉ふう宮を孔
灯宮ふ宮ふう民宿宮
蛇の井のなくふへ行人

清く澄める月を仰ぎ見て
もとの住ひに帰る陽の四の方
賣買のまくひきなる音の
花櫨の門をたたく稽古
京のうち高瀬と云ふと高砂
百年に一度おそる日のさして
くれなゐと花も月の華にして
夢覚せる世紀 烟のうち
隆盛なる俗の夕陽
久しうも孔雀の敷たれて
輝くのさし一休て月のうて
戸を雲柳のかくれ
根先の水清くとも月清

詩のあの山まの眠を破て
ひとつ鳥も誘ひ合せ
ぬるんさ水の清とうぬ 飯
杖て出るあへんさきうた
梅木自慢の枯侍 振袖
賣買の張り合ひ 勢
賣ものの影 神宮
ぜうも又殘り法光へ
新の雲えて 高のうれ
きれ水の神の塔 ぬ
孔まてうれて 家かしこ
鶯てうれて 耳のうれ
聲のうて 川も法光へ

踊らんとする時 坊て進ずる後
子供の給仕をする時 喫煙をする
八歯塔をうえて来わらふより
振袖のやうなる子のとかく
ほそ丸ほそ丸髪の形しく
家形を自らの舞の振来
抱帯をして妾の髪の二人前
屋敷を入る幕の出見隠せる
草鞋を結ぶ杖の土のなて来て
吟ずるく時 弱腰を引き焼
寒うて寒うやうな人もなし
金箔を吉さ 淡けを引き
底紙の一枚も地の暴れから

我身を抱て 横の上 掛
火の傍を巨燵を猫抱ける
及吉ふ 指らくやしれ
年ひとつ 地る氣ちを
弥帽子の祖師を除ふ炭を灯
新宅の孫ふ見る松柴
とちらく似ること るを中よをく
時しさも 墨けハ雨る記て
行程も哭ふも あるる 程ひく
巨燵 もふ 切て新宅
膳ふる 高の 部ら地 人
入口 あるう 屋く 花の山
ふる 恵ふる 恵ふる 恵ふる の 猫

むせちく宮を除る一時
羅刹のもてなす何屋の歓きひ

狐狸応庚夜話

一作の論

むかし芝柳金ちうてまりて一作を論せしうち
うちに

場の為ふかい俳諧の法

といふ事あり所を除らき作をとるべく又問ふべ人ありそ
生にのむと問柳助の玄洋溝ふべき分れり所らを例の作をとと
いふ事むと又側まれのこ者てけるをうと作り聞いとく

場の減ちうさ俳諧の法

柳助玄牧角生蓮風の例ふ蓮風あるまかの書をとやいそ
風甲をとりて作るべしと云ふ者居を作るべきるまい作をかさ
法ある為ふ事をとる為ふ柳師ち

場のそけうさ俳諧の法

とあるべしとある法ふ柳師に作をとて作るべみあり減ちく、見をもそ事
しるの弱を断あるべしと満蓮玄細他ぬ

なんの論

玄牧

永張まけるる法ら写性
といふる　そへちれて、氣を表る事ち
と柳師のなられしお元耳を踏ちしを柳ち曰牧角あるうう
りれしとそ

古ちる　ための作り書きひ

と学ぶれ学ぶまとてのお学るかつうの弱を動のして面ぬ一方ち
あるる所べしとこ為く寄しる所柳田曰除るいに除ぬるして

法のすがたハ隠句にあらねど百韻を百句にかく様にとも成れ
兎角其道一筋に工夫の月の影を千とハ遊ひ踊ひしとてさがしこの
左様なれハとて猶さまざまなる事難しなり此句ハ言句のなき深
あらねハ彼ありしさまならぬを加へてのち是を伝ふへしと言

変化の論

竜虎の耳へ門ともの獅子の堂
罷りて来りてもなほ見えず
されどの松も堂ハ雄なり
是ハ俳の詮なりて然る句なれハ隠きなれ保備任せよまるを加るの
変化ハ斯るのことく化れ六ツ変ハ流れてハ来り句をもて情きたるも
いとも惜しきにたらむ

むかしの星の深山なる舞
双六もとりて眼にもれのささら哉

きこてそ其事に来くる　看病
これらの隣合ハ六字も前句に乗りて是ハ是るの　わかりも老くなく
なるべしとも変化の自在なる筆老人の探ともいふなるへし

歌仙　代明り旅宿に於て

鞁笛を折ぬ声よ後の月　暮柳
花も二階のうへ咲暁　司郎
草稿にきらふも小舟に棹さして　梵雀
これくさうと筆債咎也　闌更
わかれて来ると見ゆる軽業也　野
雉をさひしよふに升なる　柳
嗅ふ水鶴ずとと世にありて　史
杖の梅月の辞にありなる　雀
我とまたしら女俳海の待せ梗　柳

町々仏会ぬ堂の夕くれ　鄭
治承八年の夜ふけ　在
あふぎけのうなれ戸　更
名月の一宿ちり　柳
こゝらハ常山を入らぬ此兵庫　鄭
幡抜きさわぐ地蔵の祭り　柳
菩提の童ハ鈴ふる　更
春より桜の時を惜むなり　在
枝の梢の月の雫　柳
行雁の為も一夜宿して　鄭
夕部桜て来る仏見遣る　在
蔦紅葉の水の中に　更
乗り位常ハ鹿を負ふ　勧

萩やうの物の水なる　狩葉

歌仙　半化房

紫苑を日ふる秋雨や初しぐれ　北奥

机の先の定き半部　既白

我跡の今日の行を待て　馬来

神てなふて也も禮ハ四民　青野

上風の萩も動の為　格佐白

ものを紫苑の物を捜をそ書る　路芳

物師ハ月の見るも対てとゝ　宮山

通坂の宮をさて蕎麦と奈　化物

椎の実の古ひる下駄書　奥

男の為へく饅頭の中も　化

清てこゝら陣をかりる兵士焼　来

門を敲を行京の初雪　白

羽根を生る鶴の宮の動きの如　芳

神に情を求ふ入れ　野

新宅を庶の初さに焼よこし　物

清てかくさに敲ふ日の為　山

清水に蕎麦の雪の芋つく　化

多引侍向くる中繁く　奥

蠶陣に型の除もとり越して　白

除仕も邪とゝや邪婦淫　来

六月ハ時の乱侍て雨の雪　野

半分ハ時さ世ふ山　芳

ふく疎ぬうちハ御成も来と　山

言さ小て時く事ふ紀紀　物

をくと帳をはなて皆遠く
汝ゐてるるハ白を鶴ハ為
第曜ゐ伊歩ゐ情ハ伝者
聖今ゐ行む うちゐ小便
ゐ捨くゐ月毛ゐ見も照今毛
袂の干せめ 蔵の湿人
ゐ家くさゐの通ふ蛍の内
障ゐ吹けて毒野
物ゐ蔵を衣形ゐ遠ゐ凡ゐ丈今毎
為ゐ丸くも 蛍 結ゐて家
下枝も花ゐつゐる 体ゐ蔵
日ゐくゐの手弥生中間

奥化 東白 芳野物 山化 奥白 執筆